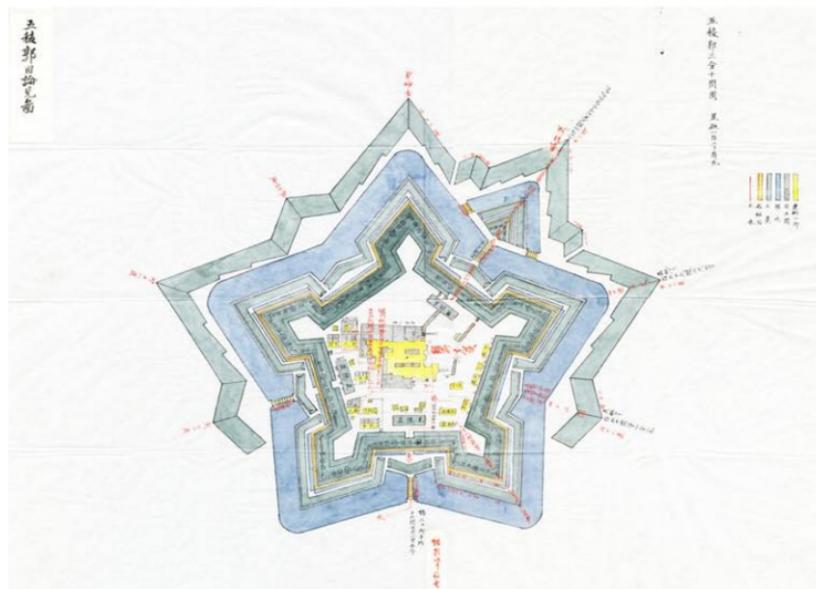


# 市民文芸

平成25年度  
函館市民文芸  
第53集



函館市中央図書館



◇俳句(熊澤三太郎 選)

〔入選〕

圓山洋子・清水法雄・佐々木克子

100

〔佳作〕

四ツ柳高保・岩崎とし恵・高山京子・坪谷郁・竹田光彦・石岡繁雄

〔選者吟〕

.....

104101100

◇川柳(池さとし 選)

〔入選〕

白井靖孝・滑川昌子・水関清

105

〔佳作〕

神羊孤・浜口豊子・能登淑子・岩本真穂・水島悦子

〔選者吟〕

.....

108106105

◇審査員紹介・あとがき

題字  
表紙

木下順一

五稜郭目論見図

『五稜郭創置年月取調書』付図

(図書館中央図書館蔵)

随筆 入選

母

瀧沢 鈴

北国の春は、山褰に雪うさぎや雪の丹頂を描きながら訪れます。今の私は四季の廻りがとても速く感じられ、この時代の流れに逆らわずについて行くのは大変な事です。自分なりに努力しようと思っています。しかしその頑張りが大きければ大きい程幼い頃のあの日、あの時の事が次々と思い出されるもの。楽しかったあの時、忘れられないあの事、等が次ぎ次ぎと湧き出てくるものです。

昭和四・五年の頃からの話。

あの頃のお正月はお正月餅を自宅で搗く家が多かった様です。私の家でも家で搗いていました。朝六時、百ワツトの電燈の下、庭にムシロを敷き、臼を置いて、これから始まる年中行事。あかあかと燃えるカマドの火、セイロ

から立ちのぼる白い湯気、白の中の蒸した米、捏ねる兄、それを搗く父、調子よく合の手を入れる姉、出来たての餅を小さくまるめ、あんこを包んで重箱に入れる母、その重箱を持ってご近所へ餅まわしをするのが末っ子の私の役目、返ってくる重箱の中には必ずお駄賃が入っていました。それは三錢だったり、五錢だったり、時には小型のマッチ箱が一個だけの時もありました。マッチ箱の時は

「スカだったね」

と、くやしがつて母に注意されたりしたものでした。そしてその駄賃は母が作ってくれた赤いチヌーリップ模様の布袋に入れるのです。と、中でチャリン、チャリン、とお金のぶつかり合う音がして少しづつ重くなります。私

はその音を聞くとうれしくなつて次のお家への餅廻しを催促したものでした。又お正月のお年玉の事です。姉達は白い馬っこ『十錢』が欲しいと言ってくれど、私は赤い馬っこ『一錢銅貨』が欲しかったのです。それは当時私達の間では、――白い馬がきたら親指をかくせ、白い馬に親指見られたら親が死ぬ――という話が流行っていたから白い馬は嫌いなのです。

年越しの夜、父から手渡されるお年玉のし袋。自分の席に帰つてそうつとのぞいてみる、そしてなぜか皆ニヤツと笑うのです。その時のあの顔、今思い出してもやはりニヤツと笑いたくなるのです。お金の数は皆同じ五枚ずつだよと言うけれど、私はお金の数は

いくらだつていいのです。さっそくあの袋財布に五銭を入れて、——とてもいい音がするので——母に渡します。そうゆう時の母はいつもニコニコ顔でだまつて皆の顔を見ているだけでした。私はいつも「これ貯金してね」と母さん局に預けるのですが一度も戻つて来た事はありません。でもなんの不思議も持たず毎年毎年渡していたあのチューリップ財布今はどこに行ったのでしょうか。

それにしても今考えてみるとあの頃の母は大変苦勞をしていたようです。父一人の収入で子供四人、皆にそれぞれの学費を出し、自分の物は何一つ買わず、愚痴一つこぼさず、洗濯に掃除、家族への縫物繕い物、三度の食事(四人分の弁当も含む)、その外にも家庭菜園の世話等々、毎日をいそがしく過ぎていた事を思い出します。又、遊んでいる私をつかまえて変体仮名を書きおしえてくれたのも母でした。

母が鬼籍に入つてもう六十八年もす

ぎた今、母の年を越えた今の自分と合わせてみて、当時の母の苦勞、それをニコニコ笑顔で乗り越えていたその力量、明治の女性はいかに強くたくましい事か、つくづくと心を打たれます。

私は今少し、世代の流れを見てから母の所に行きたいと思えます。まだやりたいことが沢山あるので。時がきたらこちらから逢いに行く事でしょう。

その時は昔話に花を咲かせ、もしまだあの時のチューリップの布財布を持つていたらあの貯金で盛大にパーティーを開き、ほほえみを失った人や、笑顔を忘れた人達をまねき、母さんのあの笑顔をお福分けしてあげたい、そんな事を考えるようになりました。

私は今健康のためスニーカーをはいて五稜郭公園内を歩いていきます。季節の移ろいに疎い私でも桜の香りに包まれているが母を恋い、その一筆一動を思い出おこし、ありし日の母の姿を充分満喫しながら……。

## 随筆 入選

### 虹の橋

坪田節子

動物愛護家の間で広がっている一編の詩があります。「虹の橋」という題のその詩は、人間に愛されて逝つた動物達は、天国の入口にかけられていた虹の橋で、満ち足りて暮らしながら飼い主が来るのを待ちます。ある日その姿を見つけると飛ぶように走り出迎え一緒に虹の橋を渡るという内容で、ペットを失つた飼い主の心を慰め癒します。

我家の愛犬も、つい先日亡くなりました。その犬は、アメリカンコッカースパニエルという品種の雄で、娘が大枚を出して買い求めたのです。やんちゃ坊主という意味の英語名がつけられていましたが、シャーロックホームズのフアンの娘がホームズと名付けました。いつも娘の後を追ひ夜は娘のベツ

ドの上で寝ていました。娘と一緒に一日に何度も階段を昇り降りしていたものです。むろん外も大好きで隙あらば脱出を試み、網戸を破つて飛び出したり垣根を乗り越えたりでよく捜し廻りました。交番に保護されたこともあり、ある時には馴染みの宅配便の車の助手席にちよこんと座つて戻つて来たりもしました。名探偵とは程遠いのか探検欲求が強いのか、一度も自力で帰ってきたことはないのです。温厚な性格のホームズは、人や他の犬に吠えることもなく、散歩の度に「可愛い」と子供達が寄つてくるのも得意気でした。七夕の夜は特に張り切つて子供達が玄関先で唄う度に一番先に部屋を飛び出しました。ホームズに会うのを楽しみに訪れる子供も多かったのです。

やがて娘も嫁いで札幌暮らし、ホームズはそのまま我家に残されました。二年程前から後足が弱り散歩の足どりもゆつたりとし、二階の私達夫婦の寝室にも昇つてくることも出来なくなりました。一階のソファアが、ホームズの定位位置であつたのにいつの間にか居間の隅で伏せることが多くなりました。食欲は旺盛なのに体重は増えず背骨も曲がり老いが目立つようになりました。獣医師さんとの縁も長くなり別れが近いのは明白でした。甘えん坊のホームズを家で看取りたいと私は強く思っていました。

そんなある日、昼食のゆで豚を私にねだつて食べた後、急に腰が抜けたように立てなくなり、それからは水しか受け付けなくなりました。

数日後、外出から戻ると私は真先にホームズのオムツを替え、体を拭いてからコットンで水を含ませると二滴ほどでやめてしまいました。ふと見るとホームズの眼から透明な水が…涙…初めて見たのです。「どうしたの」と声をかけ眼の囲りを拭いた途たんにホームズが震えだしました。そばに居た夫が「けいれんだ」と云いますので抱き上げてさすっているうちにホームズは私の腕の中で静かになりました。「息引きとつたね」と夫に云われても信じられない程のあつけない死でした。ホームズ十六才二ヶ月でした。

眼の薄いホームズの為に、居間は明りを絶やすことはなかったのですが、就寝時に久しぶりに電気のスイッチを切ると激しい寂りよう感に包まれました。

翌日、自身のブログに虹の橋でホームズが迎えるのは母か自分かと思きこんだことを聞かされた私は「それは母でしょう。順番からいってもね」と即

座に答えました。  
でも私にはわかつているのです。飼い主である娘が実家に遊びに来るのを楽しみにしていたホームズ。娘とホームズは共に四月二十日生まれという絆で結ばれた間柄なのです。虹の橋でホームズが待つのは、娘にちがいないと私は思っているのです。

## 随筆 入選

### ネコの手の逃げ足

駆け出しの医師と教員だった私達二人が結婚したのは今から30年前。それ以来、数えてみると11回の引越をしてきた。最初の15年間で8回、ほぼ2年に1回の割合である。総合病院あり、診療所あり、地方病院ありの勤務医生活を、家族とともに過ごしてきた。

総合病院勤務時代を除けば、医師住宅は病院のすぐ傍にあった。24時間365日、いつでも呼び出しの可能性のある診療所での生活。特に、新婚気分が抜けなかつた結婚4年目で赴任した診療所は、医師一人だけの離島診療所であった。携帯電話のない当時のこと、島の中なら何処にいても一斉放送で呼び出された。

島で覚えた釣りの最中に、この放送で呼び出されたことがある。場所は、

## 水 関 清

人家や診療所のある部落とは反対側にある磯。島を半周する海岸道路の行止りから、奇岩の連なる岩場を磯伝いに降りた処にある岩礁の上。撒き餌が功を奏して回遊して来たアジの群れが集まり、入れ食い状態となっていた。針から魚を外す時間も惜しいほどの興奮の中、古い拡声器からのひび割れた声

が私の耳に届いた。クローラーから溢れ出す程の、予想をはるかに超える釣りアジ。途方に暮れる思いでクローラーを置き、釣り道具と身一つで泣く泣く岩礁を離れ、道路に停めたバイクで診療所に戻った。

釣り道具だけを持って、足どりも重く医師住宅に帰ると、怪訝な顔の妻が出迎えた。食卓の上には、皿に山盛りのアジの刺身。玄關脇の魚干網の中に

は、背開きをしたアジがぎっしり並んでいる。聞けば、漁協組合長ご夫妻がクローラーいっぱいのアジを届けて下さったとのこと。組合長夫人が妻をせかしてアジのさばき方、刺身の作り方、開きの作り方を伝授して下さい、先程帰られたとのこと。

そこまで聞いて、ようやく事情がのみこめた。私の置いてきたクローラーの存在を聞いた組合長が、漁船をしばし取りに行つて下さつたのだ。海路なら陸路よりはるかに短い時間で往復できる、島特有の交通事情。住宅の小さな冷蔵庫では冷やしきれない、生温かいアジの刺身をいただいたこの夜の記憶は、今も鮮明である。

息の抜けない生活の中での貴重な潤い時間は、勤務の合間にみる子ども

たちの姿である。子どもの1日は、めまぐるしく過ぎていく。笑って、泣いて、大声を出して、走り回って、くるくるとよく動き、毎日その世界を着実にひろげて、わがものにしていく。

地方病院に勤務していた14年前の朝は、めまぐるしかった。起床とともに台所に立ち猛烈な勢いで作る妻の料理を、中学生の長男、小学生の長女と次男そして私が、順番にそして時には同時に次々と平らげ、洗いの山を残りて登校・出勤していく。物は、皆の残り物とコップ一杯の牛乳で朝の空腹をとりあえず満たすと、すでに8時。お気に入りのアニメ番組の開始曲で幼稚園児の三男を寝床から誘い出し、機嫌をとりながら朝食をとらせ、登園の支度をさせる。この頃になると次女が起き出して、ふとんの中でぐずり始める。次女は、歳の近い兄達の子供のことを見ては、同じことをしたがる。午後早くならお相手できるのだが、洗濯や台所仕事など、妻の行く先々にまわり

ついた次女の方も、この時間はお昼寝タイム。三男、次男、長女、長男と次々に帰宅してくる夕方に目を覚ましても、もう遅い。私の仕事が多めに早く終わった日には三男と次男を連れて買物に出かけ、受験を控えていた長男も次女をあやしてくる幸運な日もそれなりにあったが、いつまでもぐずっているとおふいヒモの登場となった。

夕食調理の一部始終を妻の背中越しに見たせいか、次女は幼稚園入園の頃から料理を作たがるようになってた。ホットケーキの粉を牛乳と混ぜ合せたり、バターをトーストに塗ったり、レタスを千切ったりと、それなりに満足していたのは、桜の咲く5月の頃まで。「どうしても包丁を使って、ママみたいに胡瓜を切るんだ。」と言い張って泣き叫んだのは、それから間もなくのこと。初めての運動会の前夜、とうとう根負けして「お弁当を作る時に包丁を使わせろ。」と約束して寝かしつけた。運動会当日の朝、妻と一緒に起床

した次女は、トイレもそこそこ、洗面所でしっかりと手を洗い、スキップしながら台所へ。

胡瓜を押える左手を「ネコの手」にして、右手の包丁は先端をまな板につけて根元で切るように、という妻の説明を目を輝かせて聞く次女。実際に包丁を持たせると、右手は説明通りでよいのだが、左手がいけない。ネコの手どころか、指を伸ばしたまま胡瓜を押上げて切るとする。あわてて包丁を取り上げて直すのだが聞き入れない。観念した妻と私の目の前で、右手の包丁が胡瓜に近づく。すると左手の指は、たちまちのうちに丸まってネコの手に変身した。次女の左手はこの見事な逃げ足をみせながら、無事胡瓜の端に到達した。

その次女は今、高校2年生。あれほど立ち上がった台所とは、近年とんとご無沙汰である。

## 随筆 入選

### 願い事

山本弥生

「ほっしい」四歳の娘は、真剣な目をしして私と向かい合い、しっかりと手を繋ぎ、私の膝に片足をのせ、勢いをつけてくるりとまわりながらおねだりをする。

それは、私も中学生の頃欲しくて、日記に絵付きで記していたことだった。

娘は滅多に何かをねだることはない。が、この時はやはり日に何度もねだるので、娘の寝顔に見入っている時にも、娘の声が私の中でリフレインしていた。

同じアパートの住人も娘の言葉に「〇ちゃん、ほしいんだよね」と同調するのだが、ローンにたとえたら二十年以上も支払いが続くかもしれない代物で、家計を左右する大問題である。

おいそれと与えるわけにもいかず、寡黙な夫もなにも言わない。

息子がまだ幼く、この娘が生まれる前、夫が失業し、私達には借金があった。

娘が生まれてからやっつと、夫は仕事にありつけたが、私のパート代は毎月の返済に消えていた。

「ママ、そこで待って」娘は姿が小さく見えるぐらいまでまっすぐ走っていく。くるりと振り向くといかにも楽しげに私を見つめながら走り寄り、抱き付く。

「ほっしい」私は娘をしっかりと抱いて一回転しながら空を仰ぎ見た。今は亡き母がご飯の時以外、ずっと働き詰めたことを思い、目尻から涙が伝った。

「鼻水でた」私は娘を抱いたまま、しゃがんで目鼻を拭いた。

娘は「どうして目が真っ赤なの」と私の顔を不思議そうに覗き込んだ。

「目にゴミが入ったの」「なんだ、びっくりした」母が存命ならきつと「大丈夫、なんともかなるよ」と言ってくれたかもしれない。

私は昼のパートに加え、夜もラーメン店で働くことにした。夜、暗くなったから自転車で行く私に「怖くないの」心配そうにたずねた。

確かに出前にも行くので、若い娘なら怖いかもしれないが、すでに四十路近い私は、夜道を平気で歩いていた。半年ほど過ぎた頃。夜、ラーメン店で働いていると、めまいがする。気にせず働いていたのだが、通り魔

事件のニュースが世間を騒がせていた時、仕事へ行こうとすると「ママ、行っちゃダメ。切られるよ」娘は胸の前で、なまめに胴体を切る手振りをした。「大丈夫。神様がママを守ってくれるよ」私は、後ろ髪を引かれる思いで家を出た。

以前、息子と娘を連れて、パート先のラーメンを食べさせた帰り道。タムロして通行人をジロジロ見ている男達を怖がり、娘は私の後ろに隠れたことがあった。

ラーメン店は繁華街にあり、深夜にもなると、路地で騒いでいる酔客もいるにはいたが、私には気にする余裕もなかった。

そんなある日、娘は泣いて、仕事へ行こうとする私の手をなかなか離さない。やっとの思いで手を放し、夜中に帰ると起きて待っていた。

「まだ起きてたの」私は胸を締め付けられる思いで、娘を抱きしめた。その時、私はめまいより重大なことに、

には、はたと気づき、翌朝、病院へ急いだ。

その結果に夫は驚きのあまり、茫然としていたが、娘は「やったあ」と私に抱き付いて喜んでた。

その頃、コーシヤルやチラシで見かけた無料法律相談会に、我が家の借金を調べてもらうために、思い切った向ういた。

すると返済額は大幅に減り、月々一万円、わずか三年で完済できることがわかった。心配だった弁護士費用も、五万円もかからない。

やっつと、出口の見えないトンネルの先に光が差し、みるからに紳士で、字の丁寧な弁護士さんが、正義の味方に見えた。

月日は流れ、小学校三年生になった娘は「弟」という題で作文を書いた。

それは、両親に赤ちゃん欲しいと頼んだら、二人で相談して、願いを叶えてくれたとあり、私は心底グヨツと

した。

妊娠を夫に告げた時「俺、そんなことしたかな？」ぼつんとつぶやいた。

夫と瓜二つの次男は、静かに輝いて見え、この子が成人すると私は還暦となる。

それまで何としてでも生きて、見守っていいこうと決意した。

私は中学生の頃、初恋の人の子供を男女男の順番で、三人描いていた。ただ、初恋は儂く、子どもの父親は、現在の夫にすり替わっていた。

## 随筆 佳作

# “ありがとう”を残して

大滝洋子

そろそろお昼の仕度をと、立ち上った私の背中に、「お母さん」とソファに座つていた主人が声をかけた。

いつものように、「なあに」と私、呼ばれて振り向いた私は、その後の言葉を見た。

しかし主人は目を伏せたままなので、次の言葉を促した。

すると、主人はじつと私の目を見てもう一度、「お母さん」と言つて少しの間を置き、「今までいろいろと有難とう」と丁寧な、はっきりした口調で言つた。

思いもよらないその言葉に、私は少し慌てて、「えっ、何言ってるの」と混乱した頭で、「それを言うなら私の方でしよ」と言つて、あとはわけのわ

からない事を二言三言口走つたような気がするが、全く覚えていない。

折にふれ、支えてもらったのは私の方である。この時、主人は少し間をおいて、「本当に有難とう」と繰り返したような気がする。口下手な主人には精一杯の言葉であつたらうと、後になつて思つた。

主人はそれからあまり日を置かず、夏の真つ盛り、思う事もなくあつてなかつた。

少し落付いた頃、私は改めて考えた。唐突に何がそのように言わたのであろうかと。

そして、主人のその言葉の重みを考えてみた。あの時の状況から、前もって準備していたとはとても思えない。

何かしら死期を感じてのあの咄嗟の言葉であつたのだろうか。

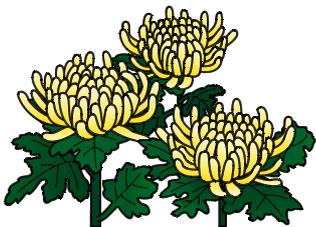
それにしても、あの日の朝、五十程の菊の鉢に水をやり、いつもと変わらなかつた筈。主人は三十年來、菊花会の会員として日作業しながら菊を育て、又後輩の育成にも力を注いでいた時である。

私たちはその頃、年が明け、春には結婚五十周年を迎える喜びで、話題はいつもその事であつた。

旅行が好きで二人は、折ある毎行先等いろいろ案を練り、話の終りは必ず「一言」金婚式を迎えるってすごいよね」と子供のようにその日を持ち焦れていた主人。そんな矢先の事であつた。今も時折、あの時の主人の真剣な目が浮かぶ。

主人が亡くなって、九年が過ぎた。悲しい気持ちは変らないが、自分の気持をしつかり伝えて逝った主人が、この頃羨ましく思うようになった。律儀な主人にふさわしい最期だったと思っている。

私もこんなふうになりたいと思うが、果してどうであろうか。折々、身近な人には感謝の気持を声にして伝えているが、これが私の精いっぱい出来る事で、今は穏やかな気持で暮らしている。



随筆 佳作

くっくく松

江川清文

これが、老いというものか。書きものをしていると、夜もかなり深けた頃になって隣の部屋から母が這いながら出て来た。

「何ばしよつとね、立ち上がりきらんと？」母はトイレに行くつもりなのであった。久しぶりの息子の家には、母のためのベッドの用意がなかった。畳に敷いた布団からは、起き上がることでできないのである。知らなかった、母はこんなにも老いていたのか。手を貸そうとして、ふと、ずつと昔と同じ光景を見たと思った。そうだ、祖母だ。私の幼いころ、祖母がこんな風に這っていたのだ。ばあちゃんだから這うのだと、その頃は思っていた。

誰も、初めから這ってなどいない。祖母だって私のもっと古い記憶の中で

は、一緒に遊んでくれたり買い物に連れて行ってくれたりしていたではないか。

「せんせーい、おはようー」私の記憶に残る最初の母は、村の分教場の先生である。あの頃は子供たちが、毎朝母を迎えに来た。母に聞くと、まだ20代半ばの話である。思っていたより、母がずつと若かったことに驚く。今の私の子供達より若いではないか。いつの間に年老いたのか、少しも気づかなかった。

母の分教場は、村の山手にあった。私の通う本校は反対の浜手にあったので、小学校に上がってからは「行つてらっしゃい」の代わりに「ばいばい」が母を見送る朝の挨拶になった。子供達に囲まれて家を出る母を見送るのは

慣れ親しんだ当り前のことだったのに、不思議なものである。何だか分教場の子供達に母を取られたような気持ちになった。授業が終わると、私は母のいる分教場へと急いだ。あの頃は午後の多くを、分教場の図書室で過ごした気がする。「ああ無情」も「愛の妖精」も、繰り返しそこで読んだ。だからフアデットは、今でも大好きな私の理想の女性になった。母の仕事が終わって家に帰る道すがら、その日のできごとや読んだ本の話をするのが嬉しかった。

途中には「へっこ松」と呼ばれる「くの字」に曲がった大きな松の木があって、母が、浜から上って来る時に皆が一休みする場所だと教えてくれた。あの頃はどの家にも未だ車など無

く、何処へ行くにも歩きだつた。夏の暑い日など、松の木の根元に腰を下ろして、流れる汗を拭いたり、涼を取ったり、一服したりした。今ではもう見かけなくなつたが、お爺さんもお婆さんも、お年寄りには皆腰が曲がっていた。それを確か「へっこさん」と呼んだ。だから「へっこ松」は、歳をとつて腰の曲がったお年寄りの松の木のことだと思つていた。

「へっこつて、何ね？」変な名前だつたので母に尋ねてそう思うようになった気もするし、松の木の格好から自分なりにそう納得していたようにも思う。記憶が少し曖昧になっている。老いた母を見て何故かこの松の木のことを思い浮かべたが、「へっこ松」をよく記憶しているには別に理由があった。ここでは、とても不思議な経験をしたのだ。「へっこ松」の裏手には小さな雑木林があったが、分け入ると一本のクヌギの木があつて、或る日とても大きなクワガタが一匹止まつていた。怖々手を伸ばすと、もう少し

のところまで「ぼとり」と落ちた。落ちた辺りを通つてみたが、掻き消されてもしたかのように幾ら捜しても見つからなかつた。次の日に行くと、また同じところにクワガタが一匹止まつている。大ききからみて、昨日のクワガタに違いない。今日こそはと手を伸ばすと、また「ぼとり」と落ちる。同じことが幾日か繰り返されると、日の落ちかけた、真赤に焼けた林の中で、何だか同じ夢を繰り返して見ているような厭な気持ちになつた。少し怖くもなつた。後には林に入らなかつたが、このことは何故か母には話さなかつた。

「何ばよつたね、遅うなるよ」雑木林を走り出ると、松の根元で待つていた母が立ち上がりながら言つた。誰も、初めから這つてなどいない。幼い日に見た祖母と同じ道をやがては母が迎るのであるうちに、今まで思いが至つていなかつた。当り前の話なのに、どうしたことか。ばあちゃんだからと納得していた老いは、あの時祖母にとつても初めのことだつたのだ。あと

十年か二十年もすれば、きっと私も這つている。

気が付くと、私は辺り一面真っ赤に燃える夕暮れ時の雑木林に一人佇んでおり、時おり遠く近くで蟬の音がしている。目の前のクヌギの木には大きなクワガタが一匹止まつており、手を伸ばすと「ポトリ」と落ちるのが分かつてゐる。雑木林を出ると、「へっこ松」の根元に老いた母が腰を下ろして待つてゐる。私は自分の姿が、幼い子供なのか老人なのか分らない。布団に戻しながら「へっこ松」を思い出した話をしたら、「そがん松の在つたねえ」と母は目を瞑るながら言つた。「まだ在るじやろかねえ……」

## 随筆 佳作

### 農家の手伝いで触れたもの

上田 征

馬鈴薯畑が薄紫色一面になつた時季、市内で農業を営んでいる姉から樹木の剪定と、周辺の草刈を頼まれた。手伝いの日、旧牛舎と倉庫に挟まれた場所に車を止めた。姉達は圃場に出て誰も居なかつた。

鎖を引く音がして牛舎の隙間から犬が、出てきた。初めで見ると、犬はと、その時、側の古材の間から黒毛の小猫が三匹姿を見せ、次に母猫が出て来ると、毛色違いの小猫がぞろぞろ出てきた。

七八匹に囲まれた猫と犬を眺めた。大猫は顔を見上げ私を見つめ、犬に大きな欠伸をされた。

特に母猫は座つたまま見つめ、瞳が綺麗であった。然し、母猫の顔がどこか見た様な顔から鼻梁にかけ白毛が

細長い斑であり、特徴のある顔だつた。例年、六月半ばには剪定の作業を手伝つてきたが、三年前に事情があつて、一時期手伝いを休んでいた。樹木は伸び放題で、住宅の屋根まで覆い被さつた樹木もあり大変な作業になる。

仕事の合間、犬猫を眺めていると、誰も居ない敷地内の大猫には自由を感じた。

共生しているようにも見えた。唯、ひもじいさがあるようだが、瘦せてはいない。

このような愛玩の飼育方法も自然であつて、農家での飼い方と一般家庭での扱い方にそれぞれの違いを比較しつつ作業を続けていた。

気温の上昇を感じてきたので、熱中

症に気をつけていた。牧草地から軽の貨物を運転して甥が、ポカリスエットと、一切れのパンを持つてきた。

林檎箱を並べて板を渡し腰かけてドリンクを飲もうとした時、猫が一斉に二人の前に集まつてきた。

「叔父さん、パンを少し千切つてくれてやつて」と、素速く千切り掌にのせ母猫にさし出したら細かく囓り毒味するように啜え、子猫が拾い喰い出来るように散らばした。

「やあ、やつぱり母猫だね、今の子捨てる人間より利口だ、母性愛なのかねえ。」

母猫は安心したのか、私の膝に上り手に持つていたパンも欲しい素振りなので、半分を猫に残りを犬にくれてや

った。

「この母猫は不思議にも家に入らない習性があるようで、ドラでなく、野生的かな」

「子猫は何時頃生れたの。」

「花見の頃、牛舎の二階で生んだようだ」

「で、そちらの犬は、柴犬かい。」

「そうだ。従姉妹が連れてきた犬だけど」

「只、お手を言うとか囁る癖があるんだよ」

「これからの躰で治るよ。大丈夫だ。」

今日は朝からよい天気であった。周辺敷地はすっかり住宅地に囲まれ、公害対策に丘陵の地域に移り肉牛を数頭育成飼育していると、農業経営の厳しい状況も語り、乾牧草の処理にと牧草地に戻った。

また静かになった。甥と犬猫や農業等色々な話をしたが、犬猫の名前は訊かなかった。

然し、母猫に不図思い当る節があった。

昨年、秋、実りの結実した頃、林檎を買いに近隣町村の果樹生産農家に家内をつれて、国道5号線を走っていた時、舗装道の路肩に鳥の五六羽の群に出会し車を止めると、黒地に白の斑柄の猫がうずくまっていた。猫の背中はつつかれたのか、血が出ていた。

早速、運良く診療所があつて、獣医の治療が出来た。猫を乗せ果樹園農家に向つた。

林檎を買つてから、農家の親方に猫をお願いしたら、気迷いなく引き受けおくれた。

帰り路、前方に二メートル程の太い青大将が、猛スピードでくねくねジャンプしながら茂みに消えた。車窓からの目撃に私も家内も一瞬怯み、顔面蒼白に身震をし、沈黙のままの運転だった。恐怖のなか、青大将と猫との関わりを想像し、余計な事をしたのかと思

いながら、唯々、猫の無事を祈った。

昼食後の家族の話に犬は昔から飼っていたが、猫は飼つたことがなく、今年始めてであり、今の猫は、「うちの父さんが、この春に七飯町の親戚から貰つてきた。」とのことであつた。

お盆も過ぎた八月下旬、姉が車で玉蜀黍等を持ってお礼券やつて来た。色色世間話をした後、帰り際、子猫の成長ぶりを訊ねたら、戸井町から何時も魚を持って来てくれる漁師の方に貰われたり、姉の主人が、国道沿いで農産物直売店で戯れあつて遊んでいる子猫が買物客の人気を煽り店に客が増えて猫好きな方々に貰われて行つたと、姉の笑いの嬉しい話に子猫の行く末と母猫の元気を願つた。

## 随筆 佳作

### ミステリーツアー

片岡 美智子

ミステリーツアー参加は三回目。行ったことのある所が当たると残念で、二回目がそうであつた。今回は初めての海外ミステリーとあつたので、いつもの旅友と行くことにした。函館空港発着なので安心。手続きで相棒が、

「アツ、パスポートが無い。ここに確かに入れたのに」と言い出した。

「他の所も探してごらん、案内家にあるかも知れないから戻って見たら」とも言つてみたが、カバンや持ち物に手を入れて探すだけ。

時間はどんどん過ぎる。係員に「今なら間に合うから家に帰つてみて」と言われやつとタクシーに乗つた。「彼女が行けなくなつても私一人で参加します」と私は言う。十分後「あ

つたよ。カバンの中の小袋に入れたの思い出したの」弾んだ声が携帯から聞こえた。

滑り込みセーフ。常に使わない物を持つ時は、入れ替えないほうが良さそうだ。

羽田経由、成田集合で道内からの全員が揃う。もう、何処に行くか知つている人がいる。

「ちゃんとハノイつて書いてあるよ」先に貰つた案内に確かに書いてある。英文なので難しそうと読まなかつた。

「良かったね、行った所じゃなくて」と喜ぶ。

一日目、ハブニングがあつたけれど移動だけで終わり。気温三十八度。蒸し暑い。

二日目、晴天、暑い。ホーチミン廟の観光。

中には入れないそうで、外から見るだけ。

凄い人、人。私は難聴なので、ガイドの直ぐ後ろについて説明を聞くようにしている。

「アツ！、やつちやつた」今度は私が失敗。

段差でなく、斜めに通路の石が削られて低くなつている。「捻挫」と直ぐわかつた。車の通行のためらしく、五メートルくらいで又斜めに元の高さになつていく。

「Kさん、ここをつけてよ」大きな声で相棒に教える。私より年長なだけだから。

転んだのでなく膝をついただけだ

し、たいして痛くないので足を引きずってゆっくり歩く。ガイドさんがシツプを貼ってくれる。

「シツプも持ってくれているのですね」とお礼を言ったら、「前にもこんなことがあって、その時は持っていなかったのだからは用意しています」

冷たいペットボトルを当てて、次からの見学。観光地はバス。一人ですに残っていた。

ここでも気がつくのは遅かったが、私が残っているので、冷房をつけたまま運転手はバスから離れられないことが分かった。それで一度は皆と降りて、近くの日陰で待つようにしたが、暑くて大変だった。日本ではどこにでも売っている、ビニール傘を買って杖にしようと思ったが、見つけられなかった。スコールの国には不用なかもしれない。

出国、入国以外観光の全行程三日間の内、ハロン湾だけは船に乗って

見ることが出来、美しさを堪能できたが後は見られなく残念。

ナイトマーケットでは、杖が売っていないか探した。

「あそこにあったよ」と教えてくれた人に感謝。十ドル。保険の対象になるので「レシート、ブリーズ」と言ってみただけ通じない。

現地のガイドがベトナム語で言ってくれたが無いそう。杖で歩くのは初体験。案だ。

最後の日。

ホテル前で前景と二人が入った写真

真を写そうと相棒が言ったが断る。昨年、夫が亡くなり家を処分する時、膨大な量の写真を整理するのが辛かったからだ。

でもアオザイ（ベトナム女性の民族衣装）の案内嬢にカメラを向けた。

美しい。相棒は

「私のために彼女に入ってもらって三人で写そう。貴女にはあげないから」とまで言う。

モデル料にチップを一ドル渡したらすんなり掌に握った。他にもいたがチップはあげていないようだ。呉れないはずの写真の後で見たら、案内嬢は頭一つ高く、幅は私たちの半分。両隣の婆さんの汚いこと。

帰国の時間の前頃から、相棒が気分が悪くなりバスの座席で横になりだした。それでも最後のお寺の観光には降りていった。下痢も始まっていてあずましくないはずなのに。

飛行機の中で何度もトイレに行きたそう。

申告もしないのでそのまま成田へ着いた。

「もし、悪い病気なら後で困るから申告した方がいいよ。保険もおりるし」と私が勧め係りの所へ行く。

成田で解散なので待てる。

「心配なものでないよう、簡単な質問だけだったよ」その後もトイレ通いはしている。

ところが、函館空港に着いたとた

ん、私も猛烈な下痢。常に下痢のしやす私なので、真つ直ぐ病院へ行った。専属医師は今日はいない。いきなり隔離室に入れられ、かなり厳密な調べられ方だった。なにも心配ないと釈放された。相棒の掛かりつけは呼吸器科なので、簡単な診断で下痢止めだけだったそう。

八十過ぎの婆さん二人連れはもう無理かも。

## 選評 対馬俊明

今年の「函館市民文芸」作品募集要項に、今年度から入賞作品は図書館のホームページで公開するということが記載されていた。文芸誌として刊行されることで多くの市民に読まれ、五十周年記念号を刊行したばかりの同誌がネット上だけでしか読むこともできなくなるとするのはいかにもさびしい。作品の応募数も大幅に減ることが予想されたが、その後、編集係の努力で入賞者には手作りでプリントされた冊子が手渡されることになったと聞いてほっとしている。ただし、今後の市民の反応については予測できない状況にあり、ともかく当欄では、市民文芸を通じて函館の町に住むもの同士の間話を広め、作品集の愛読者、投稿者をふやしていくことを心がけたい。

### 「プリン」

体の弱い私を三十四年間見送ってきてくれた母が、腰痛の手術のため入院する。手術は一応成功し、意識を戻した母は、「待たせてごめんね、疲れたでしょう」と私を氣遣ってくれる。介護する者として書かれた文章である。ここに沁み入る内容であるが、追伸として自分の病気について誤解せず理解してほしいという意味のことが書き足してある。追伸というのは手紙などで書き足りないことを補足する場合使う用語で、応募作品の場合そのことも本文の内容に含めて書くべきである。そのためには文章を工夫し練る必要があるが、それが発表する作品を書くということなのだと理解してほしい。

### 「ハトおばさんとカラス」

母が入院している病室の窓から見える情景をじっくり観察して書いてある。窓下の家の住人らしいおばさんが餌

をやっている鳩の群れの中に、ある日傷ついたカラスの子が混じっていた。おばさんが子カラスを救おうとざるを持って近づくと庇の上にはいたカラスが急降下してくる。親カラスは夕方になって鳴き続け、そこを離れようとしなない。翌日家の前に行ってみると子カラスの姿はなく、一本の黒い羽が落ちていたばかり。なぜカラスの親子の様子にそれだけ目がまつたのか、病室という非日常の様子を描くと、病院とベッドにいる筆者の異様に研ぎ澄まされた神経が伝わってきたのではないだろうか。惜しい気がした。

### 「漢字と私」

記憶力維持のために日記をつけ始めた筆者が、仕事でワープロを利用していただけいもあつて、いくつかの漢字の字面を間違えて覚えていたことに気がつく話である。誰にでもある物忘れや記憶違いを自分の場合を例としながらそれを軽妙に語るのには、随筆のおもしろさ

に通じる書き方として大いに評価したいのだが、ワープロ利用に伴う様々な戸惑いと利便性についてはいろいろ語られている昨今でもあり、読者もハタと思いついた例をもう少し挙げてほしかった。次回に期待したい。

### 「母」

昭和四・五年頃からの話とある。一家をあげて掲ぎあげた餅を近所へ配る餅まわしのお使いをして、お返しにももらった駄賃をチェーンリップ模様の布袋に入れて母に預けた記憶。その頃、父一人の収入で子供四人を育てた母の苦勞に思い当り、時が来たら亡くなった母と会って、布財布の貯金で盛大なパーティーを開き、笑顔を見失った人たちに母の笑顔をお福分けしてあげたいというのである。なんとという美しい来世への夢であるうか。老境にあって、先に逝った母親を身近に感じている心境がみごとに描かれている。

### 「ありがとうを残して」

大滝洋子

口数の少ない主人がある時ふいにもらった感謝のことは。主人はそれから間もなく夏の真つ盛りにはもう事もなく亡くなったというのである。高齢夫婦の別れとしてはこの上なく立派というか、うらやましい限りの最期である。寡黙なご主人の人物、夫婦の互いに支え合った生活の歴史が浮かんでくる作品である。

### 「くちくち松」

江川清文

少年時代、分教場の先生だった母と一緒に帰る道の途中にあった、つっこ松と呼ばれる大きな松の木を思い出。時空を超えて、夕日に燃える雑木林の中にいる自分とへつっこ松の根元で待っている老いた母の姿が描かれる。生まれ育った風土への郷愁と母の老いを目の当たりにした感慨が生み出した美しい幻影である。随筆というよりは自伝的な小説の中の幻想風景のようだ。

### 「虹の橋」

坪田節子

札幌に嫁いだ娘が残っていた愛犬を母の私が引き継ぎ、老衰で死ぬまでを看取った話である。買い求めた娘の可愛がりよう、若かったころのやんちゃぶり、老いて腕の中で亡くなる様子の描写にペットに対する愛情が満ち満ちている。題名の詩の虹の橋のたもとで待たれる相手とは、いう問いの答えに母と娘のそれぞれ思いが描かれて感動的。

### 「農家の手伝ひ触れたもの」

上田 征

題名通り農家の手伝ひに行つて出会った犬と猫たちを描いている。朴訥な語り口であるが、かじり癖のある犬と外飼いの子連れの猫が生き生きと描かれている。車の前で跳ねた青大将のこなど農場付近でなければ見られない情景だろう。助けた猫との再会というもううれしいエピソードである。

### 「ネコの手の逃げ足」

水関 清

勤務医として各地を回った三十年の生活体験の中から離島の診療所に勤務していた新婚時代の話と十四年前の四人の子供が育ち盛りの賑やかな家族風景が描かれている。たくさんのお子の中から二つを選んで、その時の地域の人々の様子や子供たちそれぞれの成長を描き出す文章はあたたかく愛情に満ちている。

#### 「願い事」 山本弥生

四歳の娘がおねだりするもの。それは親の立場からは、ローンにたとえたなら二十年以上も支払いが続くかもしれない代物だという謎解きのような書き出しで、中に多額債務の整理の仕方なども書いてある。一家の奮闘に声援を送りたくなる作品である。

#### 「ミステリーツアー」

片岡美智子

行き先が伏せられているという海外ミステリーツアーに参加した二人の、うっかりミス続きのどたばたを

スピード感あふれる文章で読ませてくれる。エネルギーシユなその若さで感服します。

#### 「書き圖める」

小学校の頃から手紙を書くことが好きで、現在も文通友達を数人持っている。年上の人、同年輩の人、年下の人、それぞれにアドバイスをもらったり、させてもらったり。書くことは思考の整理であり、生きることかもしれないのである。書くことの意味については正論である。アドバイスを受けた例など具体的に書かれていれば、もっと納得がいくだろう。テレビや雑誌に出た例やアドバイスの紹介では独自性がなく、おもしろさに欠ける。

#### 「空より参らん・・・」 絵巻物の模写の仕事に携わっている教え子

からの便りで、プリジストン美術館所蔵の「吉備大臣入唐絵巻」について、その伝来の経過、由来の謎が明らかにされ、さらに、現存する部分および他の絵巻物との照合から全体

容ではないだろうか。

#### 「地球温暖化と電気自動車」 二

酸化炭素の排出量削減のための一つの方法として、電気自動車の効率性、利便性ということを挙げて、その利用を勧めている。若い人の提言なので興味をひかれたが、温暖化対策については地球規模で多方面から論議されるべきことなのでもう少し視野を広げて、あるいは身近なところからの意見がほしかった。

#### 「命のためのきまり」 自転車による交通事故が増えていることから、歩行者として身を守るための注意事項、自転車に乗る場合の守るべきルールについて書いている。これも生徒の立場から、通学時にハツとした体験などを交えて書いてくれると説得力あるものになるのにと残念である。

の構成が明らかになりつつあることが知らされたという話である。海外に渡った日本の秘宝についての研究の一端で、われわれがその絵巻を見るにしても国立博物館で公開された際の展示目録によるしかない。絵巻の構成についての論議は専門分野に属するもので、とてもここで話題にする対象ではないと思うがいかが？

#### 「青春」

青春についての考察である。「青春を過ちの祭典」とし、たとえその「過ちが罪だとしてもその罪は青春自らがひき受ける」とする。またルソーの教育論に沿って、青春の欲望は圧殺すべきものではなく、「青春はそれぞれの仕方であつくり

「青春はそれだけの仕方であつくり自己回復する」ものと説く。筆者の深い教養と見識をうかがわせるし、若い人への愛情が感じられる文章だが、青春という概念の時代的な変遷ということだけでもこの紙数では論じきれないし、エッセイだとしても、このジャンルには納まりきれない内

## 勇気の声を振り絞れ

島崎彩佳

「春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる」

単調な声が枕草子の冒頭を唱える。古典教師である西田の抑揚のない声は、まるでお経のようだ。昼食後の古典の授業が一番きつい、とみんな言う。空腹が満たされ満足した体は、休息モードに入る。授業開始の数分後には、うつらうつらとしてきて、睡魔との格闘が始まる。高く昇った太陽からの日ざしを遮るために閉められたオレンジ色のカーテンからうすすら通る光がことさら眠気を誘う午後。魂がふわりと体から離れるような気がしてはつとす。

春、おれは高校生になった。中学の卒業式を終えて迎えた春休み。母に連れられて近所の呉服店に春から通う高校の制服を買に行った。呉服店といっても、売り場のほとんどは制服で、このシーズンだけ繁盛するような小さな店だ。市内の中学校、高校の制服がひしめく店内の細い通路を抜けると、奥に二つ試着室がある。その前で巻尺を片手に持った年配の女性に腰から膝小僧までの長さを測られている女の子がいた。おれが数ヶ月前まで通っていた中学校

の制服。母親と弟らしき小さな男の子と、お店のおばさんに囲まれて、まだ幼さが残る頬をピンク色に染めている。膝下十センチはあるんじゃないかという長さのスカート。卒業する頃には、あの子のスカートの膝上になるんだろうなと思う。

女子は短いスカートが青春の象徴だとも言うように、スカートを短くしていく。学年が上がる毎に短くなっていく女子のスカートの裾にどきどきしたのは最初だけで、見慣れてしまえばなんてことはない。時折、ひるがえったスカートの下から覗くような白い太ももが目に入るだけだ。

眠気がかくんと頭が下がって自分の太ももが目に入る。白くない。おれは女子じゃない、と自分の太もも、スラックスの緑と青のチェック模様を指でなぞる。

「春は、あけぼのの頃がよい。だんだんに白くなっていくと山際の空が、少し明るくなり、紫がかった雲が細くたなびているのがよい」

西田は黒板に白いチョークで、現代語訳を書いていく。

おれは、黙ってそれをノートに写し取っていく。緑色の板には、きちんと大きさの揃った白い文字が折り目正しく並んでいく。

朝、ギリギリまで寝ているおれは、春の朝方の空も、だんだんに白くなっていく山際も見ることがない。始業のベルが鳴る四十分前に起きて、パンを口に入れながら制服に着替えて家を出る。あと三十分早く起きれば、そんな急がなくて済むのに、と母は呆れるが、少しでも長く睡眠時間を確保したいおれは、この現状に不満なんてない。

にしても、とおれは前列二番目の席に座る朝子を見る。ぼつさり肩の上で切りようえられた真っ黒な髪は、四月の頃よりだいぶ伸びたように見える。うるさく耳の下ではねた毛先が四方八方に飛び散っている。机の上には、国語の教科書の他に数学の問題集がちらりと見える。あんなに前の席で、ああも堂々と内職ができるものだと、感心する。

二期期の期末テストを一週間後に控えたおれたちには、少しの時間も惜しい。だから、あまり自分に必要のない科目の授業時間中は、他の科目の勉強をする。それをおれたちの間では内職とよぶ。最初は真面目に授業を受けていた生徒も、入学して半年以上たった今では内職をしている。それだけこの学校に慣れたという証拠だと思えば、それも悪くない。

おれは視線を戻した。不自然に丸まった清水の背中が目

に入る。清水は今日も机の下で文庫本を広げている。

入学してまだ間もない頃の体育の時間、おれは一人、ステージに寄りかかって、試合を見ていた。「なあ」と声をかけてきたのが清水だった。男にしては白い肌を持つ清水は、全体的に線が細い。気の弱そうな笑みを浮かべながら話す姿は、守つてあげたくなる弱さと言えなくもない、とおれは勝手に思う。

「園崎つと松田と仲いいよね」

またか。この手の質問は初めてじゃない。

「まあ」

理由は簡単。なぜなら。

「おさななじみだから」

家が近所で小学校、中学校と同じ学校だった松田朝子とは高校も同じで、しかもクラスまで一緒という、なにかの陰謀じゃないかと思うほどの腐れ縁だ。そんな朝子と教室で喋っていたのを清水は見ていたのだから。

「ナイツシュー」

少し離れたところでかたまっている集団から声が上がった。コート内に目を向けると、たった今シュートをきめたいらしい男子が同じチームのメンバーに肩をたたかれて、はにかんでいた。ちらと清水に視線をずらすと、清水は興味なきそうに自分のつけているゼッケンの裾にできたほつれ

を指でひつばつて遊んでいる。

「おさななじみから発展する恋つていうのはないの？」

わーという歓声に、清水の声が重なる。またシエートがきまった。

「ないない、あんな色気のないやつ」

みんなおれと朝子をくつつけさせようとする。何もわかつていない。うんざりだ。

「じゃ、言うけどさ」

とそんなおれの内心を他所に清水は続ける。

「俺、松田のこと好きなんだ」

おれは試合をしているコートに背を向け、むせた。

「それ、マジ？」

「大マジ。ひとめぼれ」

照れたように目線を下げた清水の顔から、冗談ではないらしいことがわかる。

「入学式の日にさ、俺早く学校来ちやっただよ。まだ校門も開いてないし仕方がないから学校の近くをうろうろしてたわけ」

と清水は聞いてもいないのに、話し始めた。

「で、学校の裏にある公園に落ち着いたんだよ。したら松田さんがそこにいて、小さな子と遊んでたわけ。松田さん、スカート翻しながらその子供たちと一緒に鬼ごっこしてんの」

朝子ならありえる。早く着いちやっただから遊んでたのか、言いそうだな。

「なんかキーンときちやっただよ」

と、清水は女子みたいなことを言った。

「教室に入って彼女を見つけたとき、これは運命だつて思つたよな」

ニキビが浮いた清水の頬はこころもち赤く染まっていた。

「夏は、夜。月の頃はさらなり」

背が低く、少し横幅のある西田は、教卓の後ろに立つと、その膨らんだ腹が下が隠れる。教卓の上にはクラスの名簿。その上にのせた銀色の定規をずらしながら、出席番号の上から順番に名前をあて、質問に答えさせる。当てられた生徒が黒板に並んだ文字の指示された場所を、つつかえつつかえ音読する。

「夏は、夜がよい。満月の時期はなおさらだ。闇夜もなおよい」

夏の夜、おれは朝子に告白された。学校祭の打ち上げが終わった帰り道、家の方向が同じ朝子となんとなく一緒に歩いて帰る道すがら、不意に「洋介のことが好き」と朝子に言われた。朝子はその後で「返事はすぐじゃなくてもいい」

いから」とも言った。

もうすぐ期末テストで、それが終わればすぐに十二月。

あつという間に冬休みに入る。夏のことと遠い昔のように感じる。あれは夢だったのかと思つてブレザーのポケットに手をつまむと、やつぱりそれはある。夢じやない。「好きです。付き合ってください。朝子。」と線の細い字で書かれた水色の紙。ありきたりの言葉過ぎて、嘘っぽいと思うのはおれだけだろうか。「何か証拠を残しておかないと、また洋介は夢だとか言い出しそうだから」と帰りがけ、その場でカバンからメモ帳を取り出して、それだけ書いておれによこした。だてに幼馴染をやつてないな、と思う。おれの性格をきちんと理解しているという点では、朝子に並ぶやつは多分おれの母親ぐらいだろう。

走っていく朝子を呆然と見送つたあの日。「大事なものをなくす前に」というフレーズがおれの頭の中に流れていた。

「秋は、夕暮れ」

もう秋だ。西田は現代語訳を黒板に書いていく。

「秋は、夕暮れの時刻がよい。夕日が差して、山の端がとて近く見えている頃に、からすが寝どころへ帰ろうと、三羽四羽、二羽三羽などと、飛び急ぐ様子さえしじみじみとした情緒を感じさせる」

そこで授業終わりのチャイムが鳴った。

「明日はどこへ行くの」と女の子の声で歌われるメロデー。虹色ガールズのデビュー曲が音楽プレイヤーにっないだイヤホンを通して耳に届く。つい口ずさんでしまいそうになるほど、おれの耳に馴染んでいる。

虹色ガールズはデビューして三年目のアイドルだ。三年前、隣町の大型ショッピングセンターに母に連れられて行ったときに、初めて彼女たちを見た。母が買い物をしている間、本屋を見ていると言つて母から離れたおれは、小さなステージの上で、全力で歌つて踊る彼女たちの姿に釘付けになった。当時は無名なライブアイドルだった虹色ガールズも、今ではメディアに露出するメンバーも出てきて、有名になりつつある。

「園崎」

目の前に清水の顔があった。椅子はそのままで、体だけねじつてこちらを向いている。おれは耳にはめていたイヤホンを片方だけ外す。

「今日、小テストあったっけ？」

「いや、今日はないよ。前回途中で終わったじゃん」

「そうだったっけ？」と首を貸しげる清水に「二項定理の説明で時間くつて終わらなかつたんだよ」ただし、お前はずつと本を読んてたから知らないだろうけど、と心の中で注釈

を入れる。

「ていうか、お前何聞いてんの？」

「あー、ミスチル」

清水の質問に、俺は前々から決めていた模範解答を示してみせる。おれの片方の耳からは、女の子たちの、はつらつとした歌声が流れている。

「へー」

「どれどれ、俺にも聞かして、と言われたらアウトだけど、清水はそれ以上何も追求してこない。興味を失ったように、俺の机の上にあるプリントに目を向けている。

虹色ガールズは歌う。昨日を脱ぎ捨てて勇氣の声を振り絞れど。おれはまだ勇氣がない。

昼休みになると、今まで押し殺していたものが一斉に開放されたかのように、教室のざわめきは拡大する。この時間になると、教室の端々にばらけていた女子たちが、それぞれのグループ毎に集まり、近くの机と机をくっつけ始める。押し寄せる女子たちに席を占領され、教室の隅に追いやられていく男子たち。こんなとき、このクラスにおける女子の強さというものを嫌でも考えてしまう。そうして、教室にいくつもの塊ができる。それを見ると、小学生の頃を思い出す。小学校では、何をするにも五、六人の班でグループ分けがなされていた。

「食いに来たとき、平気でゆで卵食べてたじゃん。なんで？」

おれの言葉を無視してすたすと歩く朝子に畳み掛けるように質問する。

「ひよこがね」

「え？」

「ひよこがいたの」

朝子は立ち止まった。

「お母さんの手伝いで私、ゆで卵の殻を剥いてただけだよ。こころなしか、朝子の声はいつもより小さくしぼんでいるようだ。

「一個だけ変なのがあったの。なんか、これだけむ剥きにくくなっていうのが、殻がなかなか剥がれなくて、無理に殻をひっぱったら、自身まで一緒にべりつて剥がれて、黄身が見えたのね」

朝子は、まるで記憶の中から言葉を選ぶかのように、ぼつりぼつりと言葉を発する。

「その黄身がなんか変なの。丸くないの」

朝子はそこで、ひくっとしゃくりげた。

「良く見たら、目みたいなのと、できそくないのくちほしみたいなのくつついてて」

おれは、その光景を想像してぞっとした。

「それから卵が怖い」

忘れもしない。あれは家庭科の時間。調理実習を来週に控えたおれたちは、班のメンバー五人で、作る料理を考えていた。使える食材は決まっっていて、その決められた食材を使って作れるメニューなら何でも良し。班ごとに話し合っただめてくださったと、先生は言った。

おれと朝子は同じ班だった。ムニエルとシチューを作ることが決まり、あとは卵を使った料理を一品決めれば良かった。おれはゆで卵を提案した。同じ班の男子他二人もそれに賛成する。案だし、もうこれで決定だろと思っていたところに口を挟んだのが朝子だった。

「目玉焼きがいい」

「えー、ゆで卵でもいいじゃん」

すかさず、他の子が言う。

「だめ。絶対だめ」

朝子は譲らない。

ああだこうだと言いつ合っているうちに、ぼろっ、と朝子の目から涙がこぼれた。

「なあ、なんでそんなに目玉焼きにこだわるの？」

学校の帰り道。前をとぼとぼ歩いていた朝子におれは走って追いつき、隣を並んで歩く。

「ゆで卵じゃだめなの？」

おれは朝子の顔を覗き込んだ。

「別にゆで卵が嫌いとかじゃないよな。去年、うちにカレ

そんなのを間近で見てしまったのだから仕方がない。

「でもなんでだよ？ 目玉焼きがいいって朝子言ってたじゃん」

それなら目玉焼きどころか、卵自体見たくなくなるんじゃないか。おれは朝子の表情をそつと覗う。

「だって卵が怖いなんて、みんなの前で言えないもん。黒木君もいるのに」

ランドセルのバンドを両手でぎゅつと握って、朝子は震えていた。

朝子は当時、黒木君という男子のことが好きで、彼も同じ班だった。そのことを知っていたから、おれはすぐに納得できた。

「目玉焼きなら先に卵を割るでしょ。中身がひよこだったらすぐわかるから」

朝子はそこですつと息を吸いこんだ。

「ゆで卵が怖いのはね」

朝子の冷たい声がしんとした空気に響く。

「ゆでた卵の皮をむいて、食べる直前、割ってみるまで中身がわからないところなんだよ。そのままガブって卵にかぶりついて、残った卵の黄身が変な形だと気が付いても、口に入れてしまったらもう遅いんだよ」

さつきまで震えていた朝子は、しつかり地に足を着けて立っていた。

「だからゆで卵はだめ」

そのときの朝子の真剣な表情をおれは忘れられない。

「なあ、清水」

弁当箱を机の端に寄せて、開いたスペースに並べた英単語のプリントに目を向けている清水に声をかける。

「お前、卵好きか？」

「いきなり好きだよ」

振り返った清水の片手にはパンが握られている。弁当だけじゃ足りないからと、昼休み開始のチャイムが鳴ると同時に購買へ走っていった清水は、お目当てのパンを無事ゲットできたようだ。

「いいから、答えろよ」

何だよその質問、と笑いながらも、清水は答えを探してくれる。

「まあ、好きが嫌いかと言ったら好きなのかな」

と、あいまいに答えた清水に、おれはさらに質問を続ける。

「じゃあ、ゆで卵と目玉焼きどっちが好き？」

「うーん」

清水はあごに手をつき、首をかしげる。清水の考えるときの癖だ。

「サニーサイドアップ」

清水は、必殺技でも言うような明確さで、文字にしたら

語尾にびつくりマークがつくこと間違いなしの口調で言い切った。

目玉焼きか、というか。

「お前それが言いたかっただけだろう」

と、すかさず返す。

「いやいや、これはほんとに。俺は断然、目玉焼き派だね」

清水は「できれば半熟で」と付け加えて笑った。

どさつと倒れこんだ自室のベッドの上。テレビ画面の横に貼り付けた緑色のポストイットが目に入る。虹色ガールズ姫路愛奈が出るテレビの番組と時間帯が書かれている。毎週、公式ホームページの出演情報をインターネットでチェックし、忘れないようにこうしてメモしてテレビの横に張っておく。

おれは虹色ガールズのあいにゃんこと姫路愛奈が好きだ。あいにゃんはおれよりひとつ年上の十七歳。虹色ガールズ結成当時からいるメンバーで、グループ一期生にあたる。黒髪のメンバーが多い中、あいにゃんの髪色は金髪に近い茶色で、歌唱力も頭ひとつ抜けている。

音楽プレイヤーの電源を入れて、お気に入りの中から「ライブ・イン・東京」を選ぶ。虹色ガールズのCDアルバム初回限定版に特典として付いていた音源で、虹色ガールズが東京のライブハウスで行ったライブの一部が収められて

いる。綺麗に加工され、完成された通常のCDでは味わえない、ライブの臨場感が味わえる。最近のおCDに入らだ。

プレイヤーの再生ボタンを押して、おれは自分の持ちうる想像力を全開にして、ライブのうねりに入りこむ。ざわざわとひしめく音。パンと火花が何かの音が鳴ったかと思うと、地響きのような声が上がリ、オープニング一曲目がスタートする。空のマーチ。初期に発売された彼女たちのテーマソングだ。会場をおいっくすようにサイリウムの青と緑がゆらめく。まるで押しては返す海の波のようだ。

曲が終わったところで、静かになった会場には、期待のこもった熱気が充満する。一曲目の終わりではけていた虹色ガールズがステージの上に再び姿を現すと、その期待はいっせいに彼女たちに向けられる。「みんなー元気？」虹色ガールズのリーダー、くみっちの呼びかけに、わーっと歓声が上ががる。「次の曲はランラン。みなさん掛け声お願いしまーす」という呼びかけで、手拍子が始まる。曲にあわせて、はい、はい、はい、はいと声が上ががる。おれも心の中でそれに続けて合いの手をいれる。はい、はい、はい、はい。

こっぴん。トリップしている意識の外側で、扉が叩かれる音がした。一瞬にして現実を引き戻される。心の声が外に漏れていたのかとヒヤツとする。

おれはがばつと起き上がり、慌ててイヤホンを外す。コ

ードを思いっきりつぶった弾みでベッドの上にあつた音楽プレイヤーがかりりと音を立てて床に落ちた。

「夕飯できたよ」という母の声が扉の外から聞こえた。多分声は出していないとおれは冷静になった頭で確認する。身構えて扉をじつと覗む。母は隣の部屋に入ったようだが、タンスを開け開めする音がする。じつと息を潜めて、その音に全神経を集中させる。

しばらくしてトントんと足音が遠ざかっていく音が聞こえた。床から音楽プレイヤーを拾い上げて、停止ボタンを押してから扉を開けると、母の姿はもうなかった。廊下には夕飯のあたたかい匂いが漂っていた。

「なあ、清水」

放課後、おれは玄関にいた清水に声をかけた。

「なに？」

下駄箱から取り出した革靴をコンクリートの地面に置いて、清水は振り返った。

「おれ、朝子に告白された」

「え？」

清水はもともと大きい目を更にかつと見開いておれを見

る。「でもちゃんと断るから」

その清水の目を真正面から見据えておれは言った。

「いや、ちよつと待つて待つて」とおろおろする清水。

「いつのこと？」

「夏。学校の祭の日」

夏は夜という枕草子の一部分が頭に浮かぶ。

「夏の夜だよ」

とおれは言った。清水はなんのこじやらという顔をしてる。

「ずつと黙つてごめん」

清水は何も言わない。

「でもほら、おれ他に好きな人いるからさ」

清水は疑うような目でおれを見る。

「そんなこと初めて聞いた」

「おれも初めて言った」

深い沈黙が降りる。

「おれ、教室に古典のノート忘れたから取つてくるわ」

まだ何か言いたそうにしている清水をその場に残し、「じ

やあまたな」と言つておれは教室に向かった。

誰もいない教室。忘れ物なんていうのは嘘。これ以上清水と一緒にいるのに耐えられなくて、逃げてきた。教室の窓を開けた。ひんやりとした風が頬をかすめる。

おれはポケットから携帯電話を取り出した。慣れた手つきでメールを起動し、新規作成を開く。「おれの好きな人」

と件名に書き込んで、フォルダの中から選んだあいにゃんの写真を添付する。ちよつと迷つて、本文には「アイドル（笑）笑いたきゃ笑え。お前のこと、応援する」と書いた。最後に送信ボタンを押し、「相手にメールが届きました」というメッセージが画面に表示されたのを確認して、それをポケットにしまった。

「冬は、つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾して、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わるし」

おれは機械的に覚えたその一文を口ずさむ。

もう少ししたら雪が降るだろう。するとこの町は、白い世界に密閉される。そしたら早起きして、外に出よう。

冬は近い。

## 文芸評論

## 入選

# 啄木の診断書

水 関 清

### はじめに

その名を後世に残す「一握の砂」が刊行された翌月の明治44年1月、啄木は体調不良を感じ、2月になって東京帝國大学医科大學付属病院（以下、東大病院）三浦内科を受診した。診察した青柳医師の診断は「慢性腹膜炎」で、2月4日に東大病院青山内科に入院し、3月15日までの間、療養生活を送った。入院中の2月末から発熱がみられるようになり、3月の退院後も続いたが、5月10日の診察結果は、「肺は安全で、神経衰弱に罹っている」。7月になって発熱はおさまらず、この月には妻・節子も三浦内科で「肺炎カタル」と診断された。8月には、本郷から小石川に転居。9月、病苦の中で節子は妊娠。翌、明治45年1月、母・カツが喀血し始め、23日、往診医の診察の結果、肺結核と診断された。啄木はこの時、自身と妻の病状が母からの結核感染であることをはじめて悟った。1月30日の人力車での外出を最後に、啄木は臥床がちとなり、徐々に衰弱がすすみ、4月13日に逝去した。死因は、「肺結核」であったとされる。

啄木関係の資料に見える、その結核罹患と経過は、上記のように要約される。明治44年1月に腹膜炎で初発し、2月からの断続的な発熱の時期を経て、そのおよそ1年後に肺結核に移行したことを、啄木自身は、母の病状などから悟ったというものである。

しかしながら、臨床経過からこう判断することには、医学的にみて多くの疑問が残る。本稿において筆者は、日記や私信など数多く残されている啄木関係の資料の中に記された、その健康問題についての記述に焦点を当てて医学的観点からの分析を加え、「一握の砂」発刊後の啄木における結核症の経過について、新知見を得たので報告する。

## 2. 明治44年の啄木・その1 発症から東大病院での腹水穿刺まで

「一握の砂」刊行翌月の明治44年1月、啄木は多忙であった。東京朝日新聞での社業である朝日歌壇の選者の仕事の傍ら、前年6月に起きた大逆事件にも関心を示して、年始早々には幸徳秋水の陳弁書を筆写し、彼なりの視点で事

件記録を整理した。社友の紹介で土岐善磨(食果)と会って雑誌「樹木と果実」の創刊を協議し、旧知の北原白秋を通じて若山牧水との間の交流も始まり、歌人としての啄木の活動は、その幅をひろげつつあった。その啄木が体調不良を感じたのは、それから間もなくのことであった。

以下、啄木の日記および書簡に記載された症状と受けた医療に対して、医学的観点からの考察を加えた上で、それらの記述から推察される病状について、順々に述べていきたい。

「明治四十四年当用日記」の1月27日の欄に見える啄木の訴えは、「五六日前から腹が張ってしやうがない。飯も食へるし、通じもある。それでゐて腹一帯が堅く張って坐つたり立つたりする時多少の不自由を感じる」というものである。一読して、腹水貯留を強く疑わせる記述である。翌28日は東京朝日での社業をこなし、夜は土岐、花田、丸谷、並木、又木、高田という6名の友人たちとの茶話会で夜11時までの楽しい時間を過ごし、「疲れた馬のようになつて寝た」。29日は、電報を打って社を休み、「腹がまた大きくなつたやうで、坐つてゐても多少苦しい」中で、3時頃から夜中までかけて6通の手紙を書いている。30日の日記には、「今日は出社した。仕事をしてみると大分苦しかった。途中で焼芋と餅をくつたので腹が一さう張つた。」と記し、31日は再び社を休んでいる。

しいが、腹膜炎は腹に起ると胸に起るだけの相違で肋膜炎と同じようなものです。」

やりとりの一部始終を郁雨に伝えた後、「僕の状態はどの方面から考えても入院なんか許さない。夜勤をやめたのは遅かったが、遅かったにしても僕は入院する。大学の施療に。」という入院の決意とともに、「病院で書く。雑誌も出す。しかしきつとすぐ直るよ。僕は病気を気にしないただだから。」とも述べて、自らの病状を相対的に樂觀視している。

2月3日には、訪ねてきた友人・太田正雄の診察を受けた。太田は、歌人であるとともに、東京大学卒業を翌月に控えた医学生であった。結果は、「矢張り入院しなければならぬが、胸には異状がない」とのこと。

2月4日、啄木は東大病院の青山内科18号室に旨費の施療患者として入院した。同室者が二人いたこの部屋は「結核室」であった。

2月7日、手術で腹膜に溜まった水をとった。日記によれば、この時の処置は以下のようなものであったという。「下腹に穴をあけて水をとするのである。護膜の管を伝つて落ちるウキスキイ色の液体が一升五合許りになった時、予は一時に非常な空腹に襲はれたやうに感じて、冗談をいひながら気を遠くした。手術はそれで中止、すぐ仰向に寝せられてまた苦しい冗談をいひながら赤酒を一口のんだ。あ

2月1日、友人である又木のすすめで、啄木は東大病院三浦内科で診察を受けて慢性腹膜炎と診断され、入院をすめられた。この日の日記には、「まだ何かホントらしくないやうな気がした。然し医者のお話をウソとも思へない。社には又木君に行つて貰つて今日から社を休むことにした。医者は少なくとも三ヶ月かかると言つたが、予はそれ程とは信じなかつた。然しそれにして自分分の生活が急に変るといふことだけは確からしめた。」と記されている。また、この日診察にあつた青柳医師とのやりとりは、友人・宮崎郁雨にあてた2月2日付の書簡によると、以下のようなものであつたという。

青柳医師「すぐ入院しなくてはいいけません。遅れては可けません。」

啄木「痛くないんだから、仕事をしながら治療するといふやうな訳にいきませんか。」

青柳医師「そんなノンキな事を言つてゐたら、あなたの生命はたつた一年です。」

啄木「腹膜炎ですか。」

青柳医師「慢性的ですから痛みがないのです。内臓が非常に圧迫されているから。十日も経つと飯も食えない位ふくらんできます。」

啄木「大分おどかされますね。」

青柳医師「痛くないからあなたは病気を軽蔑しているら」とはいひ気持だつたが、腹にはまるで力がなかつた。この時の啄木の体重は、2月6日の日記によると、「十一貫六百二十四匁余、およそ44kgである。抜いた腹水が700<sup>2</sup>mlで、これはおよそ体重の6%強にあたり、一時的に血圧が下降するなどした結果、「気を遠くした」ものと考えられる。

2月8日、「昨日の手術の結果大さうラクになつたが、その代り何となく力がなくなつた。」

2月9日、「身体の加減のいい日であつた。」

ここまでの記載から考えられる啄木の病状とその経過について、医学的観点から考えてみたい。結核が国民病であつた明治44年当時、25歳の青年が、腹の痛みもなく食事もとれるのに、腹水が徐々に貯留していく経過を示して受診したこと、2月7日の腹水穿刺で得られた液体が、「ウキスキイ色」であつたことを総合すると、下された「結核性腹膜炎」の診断は妥当であつたと考えられる。

問題は、この腹膜炎が、啄木の結核症の初発症状であつたかどうかである。一般に、結核症の90%以上は肺結核であり、肺外結核の頻度は数%にとどまる。そのように少ない肺外結核の中でも、結核性腹膜炎はさらにまれな病態で、全結核患者の0.07%を占めるに過ぎないと報告されている。さらに、結核性腹膜炎は、経気道的に感染する肺結核とは異なり、直接腹膜に結核菌が感染して生ずる病態ではない。

その感染経路として、①肺病変から血行性に腹膜に播種した潜在性感染果が免疫能の低下などで活動性となったもの、②活動性肺病変からの全身性血行性播種、③腸結核など腹腔内臓器からの連続性波及が想定されており、腹膜炎発症前に肺に結核病変が存在していることが前提となる。これらを踏まえ、明治44年に啄木の身に生じた「結核性腹膜炎」が、啄木における結核症の初発症状であったとは考えにくい。しかしながら、啄木自らが宮崎郁雨宛ての書簡の中で語っているように、それまでに肺結核に罹患したという認識はなかったようである。はたして明治44年までの啄木の人生で、結核症を疑わせるエピソードは、まったくなかったのだろうか。

年譜を詳細にたどると、明治35年11月、東京で体調を崩し、翌・明治36年、故郷・渋民で療養したとの記載がある。筆者は医学的にみて、この時の疾病が初感染結核であった可能性が高いと推察する。以下にその理由を詳述する。

明治35年の啄木の日記である「秋詠笛語」によると、11月22日の項に「図書館に行き急に高度の発熱を覚えたれど忍びて読書す。四時かへりたれど悪寒頭痛たへ難き故六時就寝したり。(略)かくて妄想ついで到り苦悶のうちに眠れるは九時すぐる頃なりき。終夜たへず種々の夢に侵さる。」とある。発熱したこの日以降、体調のすぐれない日が続いたせいか、12月4日から16日間も日記をつけず、「秋

詠笛語」は「日記の筆を断つこと茲に十六日、その開始んと回顧の涙と俗事の繁忙とにてすぐしたり」との19日付の記載で終わっている。

明治36年になると啄木の生活はさらに窮迫した。下宿料未納の為に退去を迫られた啄木は、盛岡時代の友人たちの下宿を泊まり歩くという窮乏生活の果てに、父・一禎に救いを求める手紙を出し、12月27日失意のうちに帰郷し、療養生活に入った。3月19日、盛岡中学時代の文学仲間であった小林茂雄あての書簡の中で、「顔をしかめて苦い薬を飲んで、砂糖水をかきつけて暮らし、薬をもらいに医師の家まで散歩していた。」と記している。

啄木16歳の明治35年10月、強引に盛岡中学を退学して、勇んで始めた東京での一人暮らしであったが、就職活動は不調に終わり、日々の生活費にも欠く窮状の中で年の瀬を迎えたのである。思うようには志を果たせないという焦りとストレス、栄養障害、喫煙、不規則な生活など、結核感染を水際で食い止める生体の免疫能を低下させる、危険因子に満ちた環境の中に啄木はいいた。これらの要因に加えて、人口集中の進んだ東京では、地方出身者は劣悪な居住環境に置かれることも多く、啄木の場合も、実際そうであった。そして蔓延していた結核症患者との遭遇機会も、故郷・渋民に比べると、密集して人が暮らす東京では、はるかに高かったものと推測される。

啄木が生きた明治中期から末期にかけての結核の蔓延状況は、どの程度だったのだろうか。明治35年の年齢別結核感染率は資料が残されていないために不明だが、参考までに昭和25年(1950年・終戦後5年)のそれをみると、1歳2.9%、20歳54.4%、40歳79.9%、60歳90.9%、70歳93.3%である。つまり、当時の子どもたちは周囲の大人からどンドン菌をもらい、20歳時点ではほぼ2人に1人、60歳以上の日本国民の9割以上が結核菌に感染していたという大変な状況になっていたのであるから、啄木と同世代の日本人は、9割以上が結核に「感染」していたことになる。

少し専門的になるが、ここで一般的な結核症の経過について確認しておきたい。結核菌感染のほとんどは、経気道感染による。結核患者の咳・くしゃみなどで生じた結核菌を含む小粒子を、近くにいる人が吸い込むことによって感染する(これを「感染」という)。結核菌を含んだ飛沫核は、それを吸い込んだヒトの肺の中に入り、細気管支や肺胞など、肺の奥まったところで定着し、感染果をたちづくる。感染果の内部で増殖を始めようとした結核菌は、マクロファージというヒトの免疫担当細胞に食食されるが、その細胞内部で増殖を続け、リンパ流に乗って肺門にあるリンパ節に到達する。リンパ節では、感染果の周りにT細胞など免疫担当細胞が集まり、結核菌をリンパ節の中に閉

じ込めようとする。この過程の中で、ヒトの結核菌に対する免疫が成立し、新たな結核菌の侵入に対しては、以後強力な排除機構がはたらくことになる(これを「感染免疫の成立」という)。当初の感染でリンパ節に侵入した結核菌は、ごく少数ではあるものの、ヒトの体内で生き続けることが知られている。免疫監視機構が健全に働いている間は、体内で結核菌が増殖することはないが、ストレス、栄養障害、喫煙、不規則な生活など、免疫能が低下する状態となった場合には、結核菌が目覚まし、活動を始める(これを「発病」という)。なお、「感染」者の9割は無症状で経過し、残る1割が「発病」して結核症の症状を発する。「感染」者が「発病」するためには、生体の免疫力の低下や、密集した居住環境で多くの菌に曝露されるなどの要因が必要とされる。

この結核症の一般の経過と、明治35年から36年にかけての窮迫した暮らしとを照合すると、啄木は明治35年冬に結核に「感染」したが、故郷・渋民での療養の結果、ひとまず「発病」することがなく落ち着いた着いたと書かれている。

その人生を克明につづった日記と療養冊も書いている啄木であるが、明治35年の「秋詠笛語」から、次の日記である明治37年の「甲辰詩程」までのおおよそ1年もの間、筆をとっていない。通常の風邪や一時的な栄養失調なら、ひと月もすればいつもの元気な啄木に戻れたのであろうが、結核

に「感染」したための体調不良であれば、故郷での静養によつて回復した体内の免疫機構が、肺内での結核菌増殖を抑え込むまでには一定の時間を要する。結核菌の増殖速度は他の細菌に比べると非常に遅く、結核菌に感染してからの症状の進行はゆっくりとした緩慢なもので、回復する場合にも、症状の改善に時間がかかる。これらを総合すれば、啄木が健康を回復するまでに、半年程度の期間を要したと考えることは、医学的にみても妥当である。事実、明治36年5月31日から初の評論である『ワグネルの思想』の連載を始めたものの、この連載は6月10日の第7回で打ち切られている。文学的未熟さに加えて、長時間の思考に堪え得るだけの体力は戻つていなかったことをうかがわせる。しかしながら、日記中断期間のちよつと中間にあたる明治36年7月1日発行の「明星」には4首の投稿歌が掲載されているので、この頃までは相当程度健康を回復していたものと思われる。

その後啄木は、堀合節子と結婚し、一家離散と北海道放浪を経て上京したが、「文学で立身したい」という志はうらはらの、思うにまかせぬ暮らしが続いた。明治42年3月、自ら売り込んでの東京朝日新聞への入社を果たして、6月、家族との同居生活を始める。扶養の義務は重く、妻と母との確執は深く、家計に対する啄木の計画性のなさや浪費の衝動等のため、生活が安定することはなかった。紆

余曲折のすえ、ようやく明治43年12月、第1歌集「一握の砂」刊行にこぎ着けたものの、生活の窮迫はかわらなかつた。経済的困窮からくる低栄養と家族が寄り集まった窮屈な生活環境、自らの夢と現実の間の精神的葛藤、家族間の軋轢に対応する心労、どれをとっても、生体の免疫能を低下させ得ることもである。その結果、啄木の体内で休眠状態にあつた結核菌が、おそろく腹腔リンパ節で再び増殖をはじめた結果、徐々に腹水が貯留していき、「結核性腹膜炎」を「発病」したと考えれば、結核症の中でも非常にまれな病態とされる。「結核性腹膜炎」を啄木が発症するまでの経過が無理なく理解され、医学的観点から検証しても、その妥当性は高いと思われる。

### 3. 明治44年の啄木・その2 腹水穿刺から東大病院退院まで

東大病院でのその後の経過を、「明治四十四年当用日記」からたどっていきたい。

2月10日、「気分は平生と変らないが、昨日と今日、午後少し熱が出た。水もまた少したまつたらしい。」

2月12日、「また腹がふくれた。窓に首をつき出しては煙草をのんだ。」

腹水の再貯留を疑わせる記述である。

2月14日、「入浴したせみか少し許り熱が出て、午後は

不愉快だった。」

2月15日、「青山博士の廻診があつて、余病がないといふことがわかつた。そして新室の方へ移されることになつた。今迄のところは結核室なのである。」この日、結核室から12人の患者がいる5号室に移つたのである。

2月18日、「医者が診察して、もう手術はしなくても可からうといふことになつた。」

2月20日、「気分がいい日であつた。午前には手紙をかいた。」

2月22日、「青山博士の廻診の日なので午前はそれとなく急がしかつた。深呼吸をすつと少し右肺の底にいたみがあつた。ちつとばかり肋膜炎を起したかも知れないが心配はないと医者が言つた。」

異変が起きたのはこの後のことである。

2月25日、「夜発熱終夜ほとんど眠らず。」

啄木は、この日の夜から40度以上の高熱を発し、9日間続く。

2月26日、「熱四十度、終日四十度を降らず 新聞をよむこまで禁ぜらる。夜水糞のお蔭にて眠る」

3月3日、「右の肋膜に水がたまつたといふことだ。今夜はじめて水糞なしにて眠る」

3月4日、「朝には少し気分がよかつたが夕方からまた悪くてとうとう夕飯をよした。雑誌が枕辺に積んであるけ

れども、手を出して読むと寒気がするのでよまれませぬ。」

3月5日、「なほ熱が下らずに寝てゐた。」

3月6日、「午前は気分が悪かつたが午後急に熱が下つて愉快になつた。それからいよいよ肋膜の水をとることになつたが、トラカールがどうしてもささらなくて非道い目に合つた。医者はだから額に汗を流してゐたさうである。水は三〇しか出なかつた。」

3月11日、「初めて朝に三十七度以下に熱が下がつたが、午後にはまた八度近くのぼつた。」

3月13日、「熱は昨日も今日も七度台にある。今日から便所へあるといふことになった。医者に早く退院したいといふも、もう少し我慢したまへと湯についた。」

3月14日、「二十日ぶり許りで湯に入つて熱が出た」

3月15日、「並木君来る。午後退院。」

ここまでの経過を、医学的に検証してみる。まず、2月7日の項にみえる腹水穿刺時のことを振り返ってみる。啄木は、座位で下腹を穿刺され、短時間に2,700mlの腹水を体外に導かれたために血圧低下をきたし、気付けのための赤酒を飲ませられている。その結果、腹部の圧迫症状もとれ、翌日の日記にも「大さうラクになつた」と書いているが、その4日後の日記では「また腹がふくれた。」と、腹水の再貯留を疑わせる記述があらわれ、腹水穿刺の効果は一時的であつたことを思わせる。

異変が起きたのは2月25日、この日から9日間にわたって高熱を発し、その後右の肋膜炎の水がたまったことを告げられている。この熱の原因はなんだろうか。腹膜炎から肋膜炎に移行したことをもってその原因とする見方が、啄木研究家の間では一般的である。

しかしながら、腹部膨満感が主訴の主体であった2月前半と、発熱をはじめとした全身症状が主体の2月後半の病像は、明らかに異なる。筆者はその原因を、2月7日に行われた腹水穿刺の影響による、腹腔内環境の変化に求めたい。腹水穿刺当日に血圧低下と思われる症状をきたして、穿刺排液が中断されたことは、日記の記載から確かなことである。さらにこの間の出来事を、函館日日新聞に2月20日から3月7日にかけて連載したエッセイ『都雨に与ふ』の記載から、検証してみた。

『都雨に与ふ』(四)(五)によれば、「寝台の縁にこしかけた啄木の消毒された左下腹部に、医師は注射器の針を刺した後、直径1分から1分5厘ほどの黒いゴム管を挿入して腹水の排液を始めた。ゴム管からはウイスキーのもっと濃い色の液体が音もなく流れ出て、1升を超えて1升5合になろうとする頃、啄木の意識は遠のいた。頭と足を介助者で持たれて、寝台の上に乗っすぐに寝かされてゴム管を抜かれ、赤酒を口にあげがわれた」という。直径1分から1分5厘のゴム管といえは、3〜4.5mmの太さである。ゴ

ム管ではないが、我々医療者が現在常用している排液用カテーテル管の外径と大差ない。問題は、啄木の意識が遠のいた後の処置である。貯留していた腹水を排液したこと、この処置を行う前に比べて、腹腔内の圧力は下がっていたはずである。さらにそこで、まっすぐに寝かされてゴム管を抜いたのでは、骨盤内腔にあった腹水が背側に移動してしまう。大気圧より内圧の低い腹腔内に空気が侵入してしまふ。

次に、このことが臨床的に意味するものについて考察していくが、その前に、結核菌の全般的性質について触れておきたい。結核菌は好気性菌で、至適発育温度は37℃、少量の二酸化炭素が存在するとその発育が促進される。またその細胞分裂速度は非常に遅く、1個の菌が2個になるには15時間かかることされる。すなわち、増える時はゆっくりと増えるが、減る時もゆっくりと減るとい性質があるということである。発育に酸素と37℃の温度と少量の二酸化炭素が必要という条件を備える場所は、地球上ではおそらくヒトの体内以外には極めて少ないと考えられている。このことは、結核菌はヒトの体内でしか生きられて、体外環境での生息は不可能なことを意味する。結核患者の咳などに含まれる結核菌を含む飛沫も、飛沫核が他人の気管支に入らなければ、地面に落ち、じきに失活してしまうため、感染は容易には成立しない。ヒトからヒトへの感染が成立

するためには、換気の悪い狭い住居などに、低栄養や過労などといった免疫力の低下したヒトが密集して生活することなどの劣悪な条件が重なることが必要となる。事実、結核の感染率をみても、患者さんの同居家族で25〜50%、親戚・親友などの、時々会って顔を近づけて話す人で2.5〜5%、同僚・友人などの、会った時にも距離のある人で2.5〜0.5%の割合である。さらに、感染しても発病しないヒトが90%を占め、発病するのは残る10%とされている。

すぐれた抗結核薬が開発される前の治療として、「大気、安静、栄養」が称揚されていたのは、こうした事情が大きく、その頃結核にかかった患者は、ほとんど自分の免疫力で結核を治癒させていったのである。抗結核薬開発前夜の結核患者治療のもう一つの治療の柱とされていたのが、空洞に対する外科治療である。空洞を形成していない病変の内部分には、ある程度の大きさになるとほとんど酸素が供給されないため、菌の発育に適した環境ではなくなる。しかしながらひとたび空洞が形成されると、病変内部にまで空気(酸素)が入り込んでくるため、菌は活性化し爆発的に増殖をはじめ、菌数は一気に1000倍(100万個〜10億個!)にもなるとされている。この対策として、外科的に肋骨を切除するなどして胸壁を凹ませ、空洞を縮ませる胸郭形成術などが盛んに行われた。空洞を機械的につぶすことで、ある程度菌を減らせたのは、空洞から供給される酸素を減らす

こと、結核菌の増加がそれなりに抑制されたためである。啄木の腹水排液処置の中断とゴム管抜きの問題に戻ろう。寝台の縁に座らせてゴム管を左下腹部に挿入したのは、座らせることで、中に空気を含む腸管より相対的に重い腹水を、骨盤近くにまで移動させるためである。このことは、腹水を除去するためのゴム管を挿入する際に、誤って腸管を穿刺することを避けようとする上で、至極の得た手段であり、医学的に見て何ら問題はない。問題なのは、あまりに短時間に700mlもの腹水を体外に排除したために、血圧低下が起り、その処置のためにやむを得ず仰臥位にしてゴム管を抜いたことによって、腹腔内に空気(酸素)が侵入してしまつたことである。このことで、啄木の腹腔内で酸素不足にあっていた結核菌は、結果として酸素に触れることによって活性化し、増殖を開始したと考えられる。穿刺後約2週間が経過した2月20日、日記にあるように「深呼吸をすと少し右肺の底にいたみ」が生じたのは、胸腔と腹腔とを隔てる臓器である横隔膜にある裂孔を通して、腹腔内の結核菌が胸腔内にも侵入し、増殖を開始したためと考えられる。この横隔膜の裂孔は脊柱の前にあり、位置的には肺底部に近い。そして、2月25日からの高熱へとつながっていく。

前述したように、結核菌に「感染」しただけでは、高熱は出ない。低栄養などの免疫能低下状態となつて「発病」

しても、そのサインとされる症状は、2〜3週間続く咳・痰・体重減少・微熱であつて、決して高熱ではない。啄木の主症状は熱のみ、それも高熱であり、咳や痰など呼吸器症状をとまなつておらず、通常の肺結核とは経過が明らかに異なる。

熱は、生体防御機構の一環として生じることが、現代医学の常識である。平熱の場合に比べ、発熱して体温の高い状態であるほうが、生体内における免疫担当細胞の機能は高まり、感染に対してより活発で有効な防御が可能になる。ただし高熱には、生体をより疲弊させる側面もあり、一定の体力を備えていることが前提となる。事実、生体の体力の衰えている場合には、重篤な感染症の場合であつても、高熱は出ないことが知られている。すなわち、発熱という症状は、生体に侵入しようとする病原微生物と、生体の抵抗力とのバランスで決まってくるものである。したがつて、増殖が速い病原微生物の場合には、生体は、体温の高い発熱環境の中で、それを排除しようとする。

結核菌の場合、増殖速度は緩慢なため、生体の防御反応としての発熱も軽微となり、症状の中核は熱よりもむしろ結核菌が活性化している臓器に由来するものとなる。結核症の9割が肺結核であるのだから、咳・痰などの呼吸器症状が主体で、それが長期間持続することによつて体重減少もみられるのである。

吸器症状はなく、一定の食欲は保たれていることに注目したい。

その後の経過を、ふたたび「明治四十四年当用日記」からたどつていきたい。

3月22日、「病院に行つて見て貰ふ、肋膜炎の水殆どなし」

4月10日、「病院に行つて診察して貰つた。X光線で見るところでは、右肺がまだ暗く、且つ肋膜炎を起した部分の膜がまだ厚いさうである。二週間たつたらまた来いと医師が言つた。」

東大病院入院中の3月6日の胸腔穿刺で胸水は少ししかとれず、退院後初めての受診である3月22日には「肋膜炎の水殆どなく、4月10日に撮影されたX線写真で「右肺がまだ暗く、且つ肋膜炎を起した部分の膜がまだ厚い」ととの所見があることから、胸膜（肋膜）での炎症は入院中から存在していたと考えられるが、その程度は軽かつたものと思われる。

その後も、発熱は断続的に続いた。年初に土岐哀果と意気投合して以来、準備をすませていた雑誌『樹木と果実』の発刊も、啄木の体調不良に加えて、印刷所の不誠実などが重なつた結果、断念せざるを得なかつた。

4月22日、「どうもまた不愉快な気持がつづく。その理由が予自身には解りすぎるほど解つてるのだが、然しなるとくそれを考へたくない。金！生活の不安がどれだけ残

啄木の高熱の問題に戻らう。結核菌は好気性菌で、至適発育温度は37℃、少量の二酸化炭素が存在するとその発育が促進されることは、すでに述べた。啄木の場合、腹水穿刺時の急激な排液後に仰臥位とされて排液管を抜かれたことで、腹腔内に空気（酸素）が入り込んだ可能性が濃厚である。このことは、酸素供給の乏しい腹腔内のリンパ節でゆつくり増殖していた結核菌に、一時的にせよ酸素が供給されたことを意味する。酸素にさらされた結核菌は活性化し、大増殖をしようとする。これに対抗して、腹腔内にひらがる腹膜は、免疫担当細胞の豊富な器官で、増殖の勢いを増した結核菌を封じ込めようとする。通常の肺結核の場合とはことなり、急激に増殖しようとする腹腔内の結核菌を、腹膜に分布する免疫細胞が、必死に抑え込もうとする。これが啄木の高熱の原因と考えられる。

#### 4. 明治44年の啄木・その3 東大病院退院から12月まで

医師がとめるのも聞かず強引に退院した啄木であつたが、発熱は続いた。それでも3月27日には土岐哀果と牛飯を食べ、30日には丸谷喜市と散歩してココアを飲み、椿の花を買つて帰る、さらに翌4月の2日には函館・首宿社時代からの親友である並木武雄と上野公園まで花見に出かけている。熱に悩まされてはいるものの、咳や痰などの呼

酷なものかは友達には知るまい。」

生活苦の根底にある経済的困窮を、思わず日記に吐露している。

5月10日、「病院に行つた。肋膜炎のあとはまだ癒らぬが肺は安全だ、神経衰弱にかかつてあるといふことであつた。さうして新しい水菓の処方と更に一ヶ月間静養を要すとの診断書をかいてくれた——酒井繁学士が。」

東大病院で「肺は安全だ」と診断されたにもかかわらず、日記や作歌の中にはこの頃から、胸部症状についての記載が現れるようになる。5月12日の日記には、「今日は胸に多少の異状を覚えて一日殆ど寝て暮らした。」という胸部症状についての記載が、はじめて見える。また、『新日本』明治44年7月号には、胸部症状を詠つた以下の2首が掲載されている。

「胸いたみ、／春の葉の降る日なり。／葉に噎せて、伏して目を閉つ。」

「今日もまた胸に痛みあり。／死ぬならば／ふるさとに行きて死なむと思ふ。」

さらに、7月1日付加藤四郎宛の書簡には、「六月の初めから左の胸が痛み出し、少しでも身体を動かすと、叫びたいほど痛みました。それで病院に行く訳に行かず、また医者に来て貰ふ金もなく、一人で悲観してました。」と書いている。それまでの熱に加えて、6月からは胸痛も現

れて、啄木を日夜苛んでいたことがわかるが、やはり肺結核に特徴的な咳や血痰などの呼吸器症状には触れられておらず、通常の肺結核における胸水貯留とは様相を異にしている。腹膜に包まれた臓器間のスペースが広い腹腔に比べると、胸膜に包まれた肺と胸壁の間は狭く、ここに炎症の結果生じた胸水が貯まるのだから、呼吸のたびに胸が痛んで不思議ではない。ここまでの経過は、啄木の熱の原因が腹腔内、さらには胸腔内での結核菌の増殖であるとすれば、矛盾なく理解できることである。

6月には妻との不和から、妻の実家である堀合家と絶縁状態となる。心労が重なり、6月の日記は6日で終わっている。しかしながら、15日から27日にかけて詩作は行われ、25日には『家』、26日には『飛行機』という、今も名作の誉れ高い2編を含む8編の詩が書かれている。

7月に入ると、啄木はひどい発熱に苦しみ、1日に再開された日記の記載もごく短いものになっている。14日には、妻・節子も咳をするようになり、28日にはかつて啄木が受診した東大病院青山内科で、「伝染の危険がある、肺炎カタル」と診断されている。8月7日には、本郷弓町から小石川久堅町に転居したが、資金は宮崎郁雨の援助に頼った。24日には、母・カツが腸カタルと診断されている。若い頃罹患して、体内に潜んでいた結核菌が、生活苦の中でふたたび活性化しはじめたのであろう。ただ、カツの場合は啄

木とは異なり、腸カタルと診断されたからには、すでに排菌状態にあり、その菌を飲みこんで発症したのであろう。妻・節子への感染は、夫婦である以上、啄木からのものを第一に疑うべきではあるが、カツからの可能性も十分にあり得ると思われる。

土岐哀果編『悲しき玩具』に最終歌として収載されている、「庭のそとを白き大ゆけり。／ふり向きを、／大を飼はむと妻にはかされる。」は、この久堅町で詠まれている。6月以降の不和を乗り越えて、夫婦で茶飲み話できたのかも知れない。

9月10日頃には、世にいう「不愉快な事件」が起こった。8月10日から啄木宅に滞在して家事を手伝っていた妹・光子の記録によると、激怒して節子に離縁を言い渡した啄木ではあったが、9月14日に光子が名古屋に出発する朝には、「外見はもういつもの仲のよい夫婦になっていた。(三浦光子著「兄啄木の思い出」)という。翌・明治45年6月14日に、節子は二女・房江を出産することから考えると、この頃、節子は啄木の子をみごもったものと思われる。啄木夫妻は仲直りできたようでもあったと思われる。啄木は、親友であり義弟でもある宮崎郁雨と義絶した。それまで経済的支援を惜みず、啄木一家の命綱のような役割を果たしていた郁雨と縁を切ったことで、それまでの病苦に、生活苦も加わり、啄木の苦悩はよりいっそう深まった。日

記の記載も短いものが多くなった。

10月31日、「こないだ中、胸の痛かつたのはなおつてしまつたが、咳だけはやつぱり出る。もつとも胸にひびくことはさほどでなくなつた。」ここきて、咳の記載があらわれる。その後も発熱は断続的にみられるが、高熱ではなない。疾患が快方に向かったための解熱ではなく、啄木の体力の減退が免疫力の低下を招き、高熱が出るだけの体力が維持できなくなっていることを濃厚に疑わせる記述である。

## 5. 明治45年の啄木、胸の中にて鳴る音あり

明治45年が明けた。引き続き書かれた「明治四十五年日記」からその暮らしをたどっていく。啄木一家の生活の糧は、休職中も支給される東京朝日新聞社からの給与のみである。

1月2日、「妻を本郷までやつて、例の散薬を十日分とピラミドン五日分だけ買って貰つた。散薬は一日分たつた七銭なのだが、それでさへこの三月許りのうちに、たつた一週間分だけ十二月の初めに買ったきりであつた。」解熱剤であるピラミドンを買うことにも窮する経済状態だったことがわかる。

1月7日、「妻はこの頃また少し容態が悪い。髪も梳らず、古格の上に寝巻を不恰好に着て、全く意地も張りもな

いやうな顔をしてゐて、さうして時々烈しく咳をする。」

1月19日、「せつ子はやつぱり咳がはげしいので、炊事向は万事また母一人でやつてゐたが、その母が二三日前から時々痰と一しよに血を吐くやうになつた。」

前年7月14日に青山内科で、肺結核の初期病変である「肺炎カタル」と診断された節子であるが、症状の進行は急である。母・カツの症状は、開放性結核のそれであり、周囲への感染が懸念される。啄木はこの間に、原稿料を前借りした西村真次の厚情にこたえるべく、衰えた気力をふりしぼって、最後の原稿となる、評論『病室より』を書き上げているが、あろうことが、娘・京子を、節子・カツと同室させている。

1月23日、「近所の三浦といふ医者に使ひをやつたところが、三十位の丁寧な代診が来た。診察の結果は、母はもう何年前よりとも知れない痼疾の肺患を持つてゐて、老体の事だから病勢は緩慢に進行したにちがひないが、もう左の肺は殆ど用をなさない位になつてゐるといふ事だつた。」啄木はこの時、一家の病気の源が何処にあつたかを悟り、東京朝日新聞の佐藤編集長に宛てた手紙の中でこう書いている。

「前略、老母の病氣、或る行違ひのため一日に医者が二人来て見ましたが、診察の結果は二人共意見が一致し、さうしてそれが予想以上に私を驚かしました。咯血したから

こそ、「或は……」と思つたもの、それまで少しも私共は知らずにあつたのでしたが、母には何年前よりも知れない痲疾の肺患があつて、「略」私がかうして一年も直りかねてゐたのも、(略)それから妻の結核性肺炎加害兒も、矢張母の病氣を知らずにあつた結果としか思はれません。(以下略)

ここであらためて、啄木一家の結核罹患について考えてみたい。カツは当時の平均余命である40歳を越えて66歳まで生きたのだから、若い頃罹患した肺結核が、啄木一家との窮乏した同居生活の中で悪化したことは明らかである。カツは、啄木の父である一禎との間に、長姉・サダ、次姉・トラ、啄木と、妹・光子の4人の子をもうけていた。長姉・サダが、肺結核のために31歳で早逝したことをもつてカツからの感染が素地にあつたとする見方もあるが、16歳で結婚した後、貧しい生活の中で5人の子を育てたサダが亡くなったのは、夫の美家のある盛岡ではなく、夫が塗装工として働いていた秋田の小坂鉱山、結核の多い土地柄である。検討の余地があると思われる。なお、次姉・トラは68歳、妹・光子は80歳まで長命している。

啄木の場合はどうだろうか。カツは、啄木が生まれた3年後には妹・光子をもうけ、66歳まで長命したのだから、啄木の幼少期の感染は考えにくい。かといつて、啄木が「慢性腹膜炎」と診断される以前、すなわち啄木とカツとが東

京で同居をはじめた明治42年6月以降に感染したかという、啄木が家族を扶養するために最も旺盛な活動をした時期に重なつており、それも考えにくい。やはり結核初感染時期は、明治35年11月から浜民に連れれどじされる翌・明治36年2月の間が妥当と思われる。

節子の場合、結核の感染機会は、①明治41年から明治42年にかけての北海道でのカツとの同居生活に求めるもの、②明治44年の啄木・カツとの困窮した同居生活に求めるものがある。筆者は、①の立場を否定するものではないが、病状を急速に進展させた最大の要因は、次女・房江をみごもつたことであると考えたい。医学的には、妊娠することによつて、母体は胎児との間で免疫寛容が成立する。母体にとっては「非自己」である胎児を、その胎内で慈しみ育むための天与の生理作用であるが、感染に対しては免疫抑制状態となる。結核の場合も例外ではなく、②の時期、咯血を繰り返す義母・カツとの同居によつて曝露された結核菌が、節子の身体の中で増殖したのである。房江を出産後も健康を取りもどすことはなく、啄木没後1年で、節子もまた逝去している。

このような筆舌に尽くしがたい窮乏生活の果ての2月20日、「日記をつけなかつた事十二日に及んだ。その間私は毎日毎日熱のために苦しめられてゐた。さうしてする間にも金はドンドンなくなつた。母の薬代や私の薬代が一日約四

十銭弱の割合でかかつた。質屋から出しても立直さした恰と下着とは、たつた一晩家においでただけでまた質屋へやられた。母の容態は昨今少し可いやうに見える。併し食欲は減じた。」という記載をもつて、「明治四十五年日記」は、閉じられている。

友人たちが書き残しているものから、その後の啄木の姿を追うと、3月31日、友人・金田一京助が見舞いに訪れて、瘦せ衰えた啄木の姿に驚き、4月5日、父・一禎が上京して啄木の元を訪れ、4月9日、若山牧水、土岐哀果の尽力で東雲書店と第2歌集の出版契約を結び、原稿の前金を受け取り、4月12日、乾しアンの砂糖漬けを食べ、4月13日、呼び寄せた牧水と言葉を交わした後、一禎の見守る中で逝去した。死因は「肺結核」とされている。

啄木が「結核症」であることには疑問の余地はないが、「肺結核」を死因とすることには疑問が残る。腹膜炎から胸膜炎を併発していた啄木の結核症であるが、宮崎郁雨との義絶以降その窮乏の度合を深めた結果、栄養状態はきわめて不良で、このことが結核症の病像を修飾した疑いは濃厚である。啄木自身による日記の記載も残されていないこの時期、究明の手段は限られているが、その直接の死因についてはなお検討の余地があると思われる。

啄木の第2歌集『悲しき玩具』は、明治43年11月から明治44年8月までの間に書きためたノート形式の歌集が、死

の直前に託された友人・土岐哀果の手によつて編集されて世に出たものである。土岐は、資料整理の過程で、原稿用紙に書かれた2首を見出し、それをこの歌集の冒頭に据えた。後に「白鳥の歌」と称されるものであるが、諸家の研究によると、明治45年2月18日前後に詠まれたものと推定されるという。

「呼吸すれば、／胸の中にて鳴る音あり。／ 風よりもさびしきその音!」  
「目閉つれど、／心にかぶ何もなし。／ さびしくも、また、眼をあけるかな。」  
2月18日前後といえは、16の年齢から続けてきた日記すら書けなくなるほどに、啄木の病状が逼迫した時期である。

啄木研究で著名な岩城之徳は、「胸の中にて鳴る音」とは、「自覚的にラッセルないし気管支音を意識していたことを示すもので、当時すでに大きな空洞があつたことがわかる」と述べている。しかしながら医学的にみると、この見解には違和感を感じる。やや専門的になるが、肺疾患の時に聴取される呼吸音について考えてみたい。

そもそも肺に出入りする空気の流れから生じてくる音を耳で聴いて、診断に役立てようとしたのは、ラエンネック(1781-1826)をもつて嚆矢とする。彼が1816年に考案した聴診器によつて、それまでのように直接患者の胸壁に耳をあてずとも、心音や呼吸音が容易に聴取することができるように

なり、呼吸音についての研究が進んだ。ヒトの呼吸にもなつて聴診器で聴かれる音には、次の2種類がある。すなわち、「呼吸音」と「副雑音」である。さらに副雑音は、主に気道から生じるとされる「ラッセル音」と、気道以外から生じる「その他の音」に分類される。ラッセル音とは正常な呼吸音とは別に聴取される余剰音で、気管・気管支・肺胞など、気道の病変によつて生じる。ちなみにラッセル音は、ドイツ語で「Rasselgeräusch」と表記されてきたもので、しばしば「ラ音」と略される。

ラ音は、空気の通り道である気道が狭くなることによつて生じる音で、「ピー」とか「ヒュー」といった高調性の音は細い(末梢の)気管支から生じ、「ブー」とか「グー」といった低調性の音は太い(中枢寄りの)気管支の狭窄で聞こえることがわかっている。ただしこの音は、肺胞や気管支から生じてそのまま胸壁の外にまで伝わるものではなく、胸壁から耳や聴診器を離れた状態では、決して聴取できない。胸壁に耳や聴診器を直接押しあててはじめて、聴取されるものである。

啄木の「胸の中にて鳴る音」に戻りたい。ラ音の性質上、自らの胸部の中で生じた音であっても、それを啄木が自分の耳で直接聞くことはありえない。では、岩城がいうように、空洞があればどうだろうか。空洞は肺胞が破壊された状態で、呼吸によつて拡張収縮する機能は失われており、

空気の流れは生じえない。聴診しても、空洞の周囲に残された肺胞を出入する気流で生じる呼吸音を、空洞を隔てて聴くことになるので、減弱した呼吸音が聴こえるだけである。「胸の中にて鳴る、凧よりもさびしきその音!」とは、どんな音なのだろうか。明治45年2月の時点で、啄木の結核症は、腹膜炎から胸膜炎を併発し、日々の薬代にもこと欠く暮しの中で、病状は急速に深刻化していた。しかしながら、啄木が、カツのように咯血したという記載は見あたらない。この一方で、日記等の中にはしばしば現れるのは、胸痛についての記事である。胸膜炎の結果として、胸水貯留や胸膜(肋膜)肥厚があった可能性は、濃厚である。これらが存在する場合、聴診器で聴く呼吸音は減弱し、弱く、遠くに聞こえるはずである。「胸の中にて鳴る」ほどの強さではあり得ない。

もうひとつの可能性を考えてみる。啄木が、周囲の誰もが寝静まった深夜、苦しい眠りからいつとき目覚め、耳を枕に押しあてて横臥している場合を想像してみる。一般に胸水貯留の度合いに左右差がある場合、胸水がより多く貯留している側を下にして横になると、その逆の寝方をする場合と比較して、呼吸は楽になる。啄木の場合にも、きつとそうした寝姿をとつたことがあつたはずである。

水を含んで肥厚した胸膜を下にする体位で、耳を枕に押し付けて寝ている姿を想像してみる。この場合、胸水や胸

膜は良好な伝導体になる可能性がある。遠くに聞こえる心音に交じつて、気管支を通過する弱い気流が発する音が聞こえたかもしれない。啄木の耳にとどいたのは、冬の到来を告げて、勇ましく電線をビュッと鳴らす風の音ではなく、細々と燃えている己が命の証しとして微かに聞きとれる、こんな音だったのかもしれない。

## たちまちのうちに

佐藤 千代美

(一)  
湯の川から函館山の麓へ伸びる海岸線。

啄木小公園から先にある低い岸壁は昔、恒例行事で市内の小中学生が塗り替えていたという。時を止めた壁画を左手に、私は自転車走らせる。

今日は風が強い。よく晴れていて、存在感の強い夏の雲が東へグングン流されていく。

青柳町の電停へ向かう、なだらかな坂道を登りきれば下り坂へと切り替わる。この緩やかな曲線が私は好きだ。函館山の新緑が目飛び込み、抱かれるような心地になるのだ。

終点・谷地頭を過ぎたところで左折。そこから少し入り組んだところに、母方の叔父が聞く塾、兼・自宅はある。自転車を停めると、汗が一気に噴き出てくる。亀田本町のアパートから、景色見たさに大きく遠回りしてきた反動だ。

頭はまだ響く鼓動を落ち着けてから、細いフレームの眼鏡の位置を直す。

ようなこともしながら、叔父はこの小さな個人塾を切り盛りしている。

中学時代までは叔父の世話になった私も、大学へ進学してからには空き時間で格安アルバイトとして手伝いをしていた。

「じゃ、若先生も来て下さったことだし、俺はチョイと出てくるかな」

塾講師には似合わない威つい体格の叔父が立ち上がり、私の肩を叩く。

講師のバイトを始めてから、叔父は私のことを『若先生』と呼んで揶揄するようになった。最初は顔をしかめたものだが、今では慣れてしまい、いちゃいちゃ反応することもない。

「柚子ちゃんのお宅ですか？」  
柳田柚子ちゃん。

生まれつき体が弱く、療養の為この春に越してきた少女。

来年、小学校へ上がる前に少しでも予習をしておきたい、ということらしい。

このまま函館に根を下ろすか、生まれの東京へ戻るかは体調次第で、そういった不安もあるようだ。

名と事情は聞き知っているが、私は彼女と顔を合わせたことがない。

彼女の母親と叔父が知り合いという伝手で叔父自身が個

塾のある建物の一階は喫茶店となっており、外側にある錆びかけた階段を上ると扉が三つ並んでいる。

『たちまち塾』と木製プレートが下げられた手前の部屋と隣は中で繋がっており、最奥が叔父の住居だ。

チャイムを鳴らして扉を開ければ、講師用のデスクに着いていた叔父が苦笑いで迎えてくれた。切れ長の目尻が優しく下がり、糸のようになる。

三十代半ばを過ぎて独身であること、常から子供を相手にしていることから、実年齢よりいくらか若く見える。私と一回り以上離れているが、兄と紹介しても通じるほどである。

「休みの日にまで来るなんて、随分と仕事熱心だな」

「放っておくと、手に余るほど抱え込むでしょう、兄さんは」

私もそんな叔父を『兄』と呼び、慕っていた。

教科ごとに分けられた採点の残るプリントの山を二つ三つ奮い上げ、含み笑いを返す。

少子化が進み経営も困難な昨今だが、時には家庭教師の

人的に勉強を見ており、その時間の穴埋めとして私はこの塾で講師をしているというわけだ。

バイト料と叔父が手つかずの缶コーヒーを私に差し出し、そうして出て行ってから、教室は静寂に包まれた。

ようやく汗が引き、先程まで叔父が座っていたワークチエアを引く。

古びた壁掛け時計の秒針の音と穏やかな波の音、潮風が窓を揺らす音。一階の喫茶店から漏れてくる、名も知らぬクラシック音楽が狭い空間を満たす。

遊ぶ友人が居ないわけでもないが、ここで過ごす時間が私が一番好きだ。予定に空きがあれば、叔父の留守を預かるようにしている。

答案用紙の採点を進めながら、いつも同じ所で躓いている子、クリアしている子などを頭に入れてゆく。次の授業の要点とするために。

七月。

間もなく学校は夏休みへと突入し、子供たちは短い夏を謳歌する。

函館の夏は良い。

函館の夏は短い。

海で泳ぎ、山を登り、祭りを楽しめば風の感触が変わり始める。

人見町の実家からこの塾までは、自転車です十分程度。海と山が近く、博識の叔父と共に居ることは楽しくて、小学生の頃から何かにつけては遊びに来ていた。

夜には帰ることもあったし、そのまま泊まり込むこともあった。独り身の叔父は鷹揚で、子供の私をいっただつて笑つて受け入れてくれた。

叔父のもとに居るのなら、と両親もそれ以上は追及しない。

公認の隠れ家、という狭い世界だが、そうして私は潮の香りと共に思春期を過ごした。

叔父、そして学区の違う塾生達との時間。

そこにもう一つ、水面に投げられた石の波紋のように、心に広がる存在がある。

波紋は消えてしまひ、再び目にするのではないであろうと知っていた。

彼女のことを、私は『岬さん』と呼んでいた。

中学生の頃だから、六年前になろうか。

その日、私は珍しく父親と口論となった。

内容は深く覚えていないが、両親の想定内である叔父宅訪問という枠に収まりたくないと考えたことだけは記憶している。

進路を変え、叔父の家の少し先、立待岬を目指した。そうして私は、岬さんと出会った。

るのは、退屈しないかもしれない。

坂の途中で力尽き、温くなったスポーツドリンクを口に含みながら、私はそんなことを考えた。

汗と共に意地も怒りも流れ出てゆくようで、坂を登りきり、津軽海峡を正面に捉えた時には言葉も失った。

潮風は涼やかで、濃い空の色をグラデーショナルに海が映し出す、その先には青い山並み。

触れることのできない海面を目にし、胸中に渦巻いていた感情が静かに引いていった。

駐車場の傍らに自転車停め、柵へと歩み寄る。

観光客の姿も幾つもあった、その中で一人、目を引く存在があった。

白いレースの日傘に、白地の夏着物、薄紅色の帯を締めた黒髪の女性。

まるで、ドラマにでも出てくるような——日常生活では見かけることのないような出で立ちに、私は息を飲み込んだ。

風が吹き、長い髪を押さえる仕草に見惚れた。

「東海の小島の磯の白砂に」

「われ泣きぬれて 蟹とたはむる！」

美しい曲線を描く大森浜へと視線を向けた女性がポツリと声を発するのに合わせ、私は反射的に鏡きを挟んでしまつた。

叔父の家から近いというのに、私が立待岬へ行くことは稀だった。

昔は泳ぐこともできたらしいが、落石の危険があるからと、眼下の岩場へ降りることもできない。

触れることのできない海水などつまらない。だつたら、泳ぐことはできなくとも、大森浜で足を濡らし、海老を捕まえた方がよほど楽しい。

そう話す、叔父は確かにと頷いて『お前には、まだ早いかもな』と笑うのだ。

他の誰に子供扱いされても頭にくるが、叔父にだけはそうといった感情は浮かばない。私にとって、最後の岩が叔父なのだから。

岬へ向かうことが憚られる理由に、到着するまでの長い時間、自転車を押しながら、幼い私は早速、その二つの点で後悔していた。

隠すもの何一つなく坂の上に居る私を焼いてくる日差し。坂の途中からの景色は美しいが、もれなくついてくる墓石。幽霊の存在を認めるか否かという問題ではなく、不気味に感じてしまうのだ。

(嗚呼、でも) 人間が死んだ先、どうなるかなどわからないけれど、もしも魂がその場に留まるのだとしたら。この景色を毎日見

今、思い起こしても赤面ものだ。幼きゆえの、知識顕示欲だとは、いえ。

「あら」

ゆつくりと傘を巡らせて、女性はこちらへ振り向いた。年の頃は二十を超えたくらいだろうか？

中学生の私には、女性の詳細な年齢を当てることなど難しい。ただ、学生独特の空気は薄いように感じた。

「石川啄木を、ご存知？」  
「小学校の、自由研究で……」

この辺りのやり取りも、思い出すたびに枕へ顔を突つ込みジタバタしたくなる。

啄木を知らぬ函館市民はいないだろうし、自由研究だなんて単語を持ち出す必要もないだろう。

それだけ動転していたのだと、そう、解釈いただきたい。癖のない艶やかな黒髪を風になびかせて、その人は柔らかに笑つた。

「じゃあ、きつと、私より先生ね」

「……観光の方、ですか？」  
「似たようなものね」

私の問いへ、肯定も否定もせず、女性は背まである長い髪を押さえる。指は細く白く美しかった。

会話はそこで途切れ、かといつて立ち去るには惜しい景色を前にして、言葉なく私達は海峡を眺めていた。

潮風が温度を落とし始めたころ、彼女は日傘を閉じた。「そろそろ、帰らないと……」。先生は、ここへよくいらつしやるの?」

「せん……?」

『先生』、予想だになかった呼称に、私は思考が止まると共に声が上ずった。

「石川啄木についての、先生。良かったら、少しずつで良いの。教えてもらえないかしら」

「構いません。塾が、この辺りなので」

夏休みですし。

付け足すと、彼女は少しだけ驚き、すぐに笑みへと戻した。

「そう……、良かった。今の時間帯は、だいたい居るの。いつでも声をかけて」

「あ、ええと、あの、僕は、なんと呼べば」

互いの自己紹介すら未だであることに気づき——しかし、改まるのもおかしな空気で。

「そうね……、好きに名前をつけて?」

何かを演じるように、悪戯を企むように、彼女は笑う。

私はややあって、『岬さん』……立待岬の、岬さんと。

彼女を呼んだ。

夏休みが終わるまでの、二週間ほどの交流だった。

小学生の頃の自由研究課題から、時には叔父の所蔵する

本まで持ち出し、私は岬さんと海峡の風に吹かれながら他愛もない会話をした。

互いの細かな事情は話さない。

興味が無いわけではないが、立ち入ったところで自分が出来るとも思えなかったし、彼女から踏み込むこともなかった。

「今日で、夏休みが終わりなんです」

「そう……。もう、会えないのね」

「会えない、ですか?」

「私も、帰らないといけないの」

「……ああ」

観光のようなもの、と出会った頃に話していたことを思い出す。

いつまで居るのか、どこに滞在しているのか、どこへ帰るのか。最後の最後まで、訊ねることが出来なかつた。

「ありがと、先生。忘れないわ」

「僕もです、岬さん」

軽く握手を交わす。白くほっそりとした、頼りなげな手。日に焼けた己の手と対照的な、壊れもののような繊細な感触を今でも忘れない。

もう、会うことはないだろう。

岬さんの言葉を胸の中で繰り返しながら、私は落としそうになる涙をこらえていた。

思い返すだけに、苦笑いしか出てこない初恋だった。……初恋だったのだと思う。

私も彼女も、おそらく過分に自身に酔っていた。

多少の補正はあるかもしれないが、それでも、あの夏は自分にとって特別なものとして今も胸に残っている。

「若先生——」

ドアを開けて、塾生が三人ほど転がり込んでくる。

「学校の宿題、やっていっていい?」

「いいけど、答えは教えないよ」

「アテにしてませーん」

ガヤガヤと賑やかに、小学生たちはランドセルを下ろして書棚から参考書、辞書の類を引つ張り出してゆく。

その中の一人が、私の手元在る缶コーヒーに気がついて指をさした。

「あっ、若先生いいもの飲んでる!」

「アテしてないんだろ」

「おとなげないこと言わないでくださいー!」

「宿題が終わったらな?」

「おっしやー!」

盛り上がる子供らに目を細め、私も物思いから目の前の仕事へと意識を戻す。

私が塾生だった頃から、変わらずこの場所は『子供たちの駆け込み寺』だ。

家へ帰っても誰もいない子供。家へ帰りたくない子供。

『塾だから』その一言をフリーパスチケットに、抛り所としている。

学校とも違う、堅苦しい成績重視の進学塾ともちよつと違う。この空間は、叔父だからこそ作り上げ、維持してられるのだろう。

その末席に私がいることが、なんだかくすぐったい。叔父とて真つ直ぐにだけ生きてきたわけではないだろう

が、こんな風に進めたら、と思う。

「結婚?」

家庭教師先から帰ってきた叔父からの報告に、私は思わず手にしていたペンを取り落とした。

「ああ、今年の九月だ。若先生には真つ先に伝えようと思つてね」

「二ヶ月もないじゃないですか」

「向こうの、誕生日の前につてさ」

「……ああ」

叔父の交際相手とは、私も面識がある。

むしろ、今までなぜ結婚しなかつたのか疑問に思うくらいであった、が、なるほど崖っぷちの年頃か。

半笑いを浮かべる私の額を察した叔父がベシリと叩く。  
「塾は、どうするんですか？」

「……うん」

わずかに、叔父の表情が曇る。珍しいことだった。

「続けるよ。俺が寿退社してどうする」

間をおいて、それから笑顔を作り、叔父は応じた。

塾の経営が苦しいことは知っている。結婚して、家族が増えて、抱える不安が無いわけがないだろう。

不安に駆られた自分が情けなくなる。いつまで、私は叔父を拠り所とするつもりなのか。

もしも、ここが無くなったら――。

叔父への祝福よりも、真つ先にそんなことを考えてしまふなんて。

(いつか)

いつか、自分はこの塾から正式に卒業する日が来る。

いつかなんてものじゃない、大学を卒業して上手いこと就職が決まれば、それでお終いだ。

残された夏休みの日数を、突きつけられた思いだった。

ふらふらと、夕暮れ前の岬へ続く坂を登る。

日は傾いていて、潮風もわずかに温度を落としている。

(いつまでも、子供じゃないんだ)

長かった黒髪は、顎もとでスッキリと切り揃えられていた。

(二)

岬さんと再会したのが七月上旬のこと。

立ち入ったことは聞かない。

話題は六年前の思い出、石川啄木の唄、函館の歴史。そんな辺り。

何かに触れることを恐れるように、けれど離れることを恐れるように、私達はしばしば、立待岬で語った。

約束はしないから、岬さんが居ない時もあれば私が居ない時もある。

それはそれで心地よい距離であった。

そうこうしている間に夏休みがやってきて、八月となる。

函館の、短い夏の折り返しだ。

「港まつり、一緒に行きませんか」

私としては、かなり思い切った誘いだだった。

岬さんも、日傘を取り落しかけていた。

「ああ、ええと、いや、先約があるならいいんです。人混みが嫌いだったりとか」

頭では解っているつもりだった。

叔父が甘えているばかりではないけない、懂れているばかりではないけない、自分で自分の道を見つけてはいけない。

終わらない坂道のように、到達点を先延ばしにしていただけ。

終わらない坂道は無いように、いつかは必ず、方向を決めなくてはいけない。解っていたことだった。

坂を登り切り、遠く海峡を眺める。

潮騒が耳に心地いい。

目を細め、そして私は息を呑んだ。

誰もいない立待岬。

白いレースの日傘に、白地の夏着物、薄紅色の帯を締め

た黒髪の――

「岬さん？」

まさか。まさか、と思う。けれど。

口の中で呟いた、私の声は届かなかつたはずだ。

しかし、そのタイミングで、女性はやつくりと振り向いた。

「先生」

嗚呼。

六年分、お互いにしつかりと年を取って。

それでも美しく、岬さんは微笑んだ。

「そんなことはないです、嬉しいですよ……。でも、いいのかしら、こんなおばさんで？」

「岬さんは綺麗ですよ！」

反射的に口をついて、それからどちらともなく顔を背け合う。

こういったところが、どうも私は進歩していない。それとも、岬さんの前では引きずり出されてしまうのだろうか。

ややあつて、岬さんがくすくすと肩を揺らした。

「ありがとう、先生。でもね、本当におばさんのよ……」  
笑い、そしてどこか泣きそうな表情で、岬さんは使い込まれた日傘を握り直した。

港まつり期間は流石に塾も休みで、来月に挙式を控えている叔父も婚約者も出掛けるらしい。

色恋より塾生たちへの心配りを最優先にしてきた叔父も、一人の男というやつだ。

減多に締めることのないネクタイなんぞを選んでいる。

心なしか、いつも無造作な髪も丁寧に撫でつけられていた。

「どうした若先生、ニヤニヤして」

「しているのは見さんでしよう」

「そうでもないさ」

言葉と表情があまりにも一致していて、私は返す言葉を失った。

「……兄さん、何か、あったんですか？」

「うん？」  
「何も無いって誤魔化せていると思つたら、それは猿芝居ですよ。熱帯植物園の猿も騙せない」

「それは酷い」

叔父が私へ嘘を吐くことは滅多にない。

私も叔父へ嘘を吐くことは滅多になく、だから互いに隠し事をすればすぐにわかる。

そうやって、時を過ごしてきたのだ。

「塾、厳しいですか？」

「……うーん」

ずっと気になっていたことだった。

相思相愛の相手が居て、互いに適度な年齢でありながら『結婚』という再スタートを踏み切ることをしなかったのは、そこにあると考えていた。

私は叔父の交際相手を古くから知っていて、彼女も一人で生活する分には問題のない職業婦人だ。

無理に結婚などという鎖で縛らずとも、交際だけなら問題ないだろう。

「向こうの、ご実家がね」

「え？」

「民宿をしているんだ。ご両親も、そう若くはない。継がせるか豊むか……。そういう話し合いをしていてね」

「継ぐって、兄さんがですか？」

叔父は、言葉なく口の端を歪めた。どんな表情をしたらいいのかわからない、そう言っているようだった。

ふつりと、心を繋いでいた細い糸が切られた思いだった。独りで塾を続けてきた叔父には、相手方の気持ちが変わるのだろう。

『継がせるか豊むか』と言ったところで、本音の望みくらい感じ取れる。  
人と接することを苦としない叔父だから、経営するのが民宿となったところで問題なくやっていけるだろうと思

うけれど、それじゃあ、この塾はどうなる？  
叔父だからこそ創り上げてきた空間だ。

(私は)

違う

(駆け込み寺は)

それも違う

(替えなんて、幾らでも)

それだって、違う。

誰だって、一つの場所がなくなっても、きっと新しい居場所を見つけるだろう。

解つてる。

解っているんだ。

民宿も、塾も、天祥に掛けられるものじゃない。

選ぶのは、叔父だ。

からふらとした足取りで、私は待ち合わせ場所へ向かう。十字街では商店街主催の祭りが開かれていて、電車道路を挟んで向かい側のケーキ店前が約束の場所。

時間より随分と早く着いてしまった。流石に岬さんの姿は未だない。

屋台から流れて来る食欲をそそる香りに目を閉じ、私は心を鎮めようと努めた。眼鏡の位置を直し、呼吸を整える。

自分から誘っておいて、他のことで頭を占めるだなんて失礼極まりない。

(そういえば)

立待岬以外の場所で、岬さんと逢うのは初めてだ。

六年前と変わることなく常に夏着物の彼女だが、今日は浴衣だろうか？

ティーシャツにハーフ丈ジーンズと、思い切り普段着の自分に呆れてしまう。いや、ここで付け焼刃の浴衣という

のもわざとらしいではないか。

「せんせい？」

「あ、岬さん……」

呼びかけられ、反射的に振り返るが……その先に岬さん

は居なかった。

「せんせい」

くい、ジーンズを引かれる。それが子供の手だと認識するのになや掛かった。

「……迷子かな？」

塾生ではない。まだ、小学校に上がる前位の女の子。白地に赤と黒の金魚が泳ぐ浴衣に身を包んでいる。

「これ、わたしなさい、って」

「え」

しゃがみ込んで視線を合わせると、女の子は手にしていた小さな巾着から一通の手紙を取り出した。

『娘を連れて逃げてください 岬』

「え」

「やなぎだ ゆず、ごさいです！」

「さくらい しゅういち、じゅうきゅうさいです……いや、そうじゃないな」

いや待て、今、この子、

「ゆず…… 柳田柚子ちゃん、もしかして兄さんのええと、橘圭介先生は知ってる？」

「たばなせんせい、ゆず、だいすき！ とっても、おは

なしがおもしろいの」

全身から血の気が引いた。

岬さんが、柚子ちゃんのお母さん。

柚子ちゃんのお母さんと叔父は知り合いで——柚子ちゃんは今五歳、私と岬さんが出会ったのは六年前——、まさか、いやまさか。

下世話な想像が脳裏を過り、私は全力で首を振った。そういえば柚子ちゃんのお父さんについては聞いたことが無かった。

『娘を連れて逃げて』とはどういうことか、それじゃあ岬さんは今、どこに居るのか…… 叔父が浮かない顔をしていたのは、まさか。

「柚子ちゃん、お母さんは、どうして今日、ここへ来れないの？」

「えーつとね、『せんせい』がゆずずを、おまつりにつれていつてくれる、つて！」

岬さんによく似た少女は、大きな身振り手振りで嬉しそうに。小さなおさげが、それにあわせてピョンピョン跳ねる。

駄目だ。きっと、『聞かれたらそう答えるように』と教えられている。

状況が、全く掴めない。

「居た！ 柚子！」

人の波を割くように、低い男の声が響いた。

とも思う。

子供に怖い思いをさせたくなかった。

「柚子ちゃん、かき氷、食べる？」

「べるー！」

ここまで来たら、大門まであつという間だ。

叔父達も来ている可能性が高いし、冷たい物で心を落着けてからの方が良いだろう。

私は柚子を降ろすと、手を繋いでゆつくりと歩き始めた。相変わらず状況を把握できないままだったが、がむしやらに体を動かしたことによる爽快感と、恐らくは少女を守れたのだろうというおぼろげな達成感で、少しは気分が浮上っていた。

祭りを楽しむ人々の声、幼少の頃から擦り込まれた定番の音楽を愉しむ余裕が戻ってきていた。

予想に反し、叔父は祭りへ来ていたわけではなかった。

婚約者の実家とのことだ。

詳しくは明日話すと言われ、それが答えなのだと私は知った。

ならば、柚子ちゃん……岬さんは？

「兄さん、一つだけ、今すぐ教えてほしいんです」

『どうした？ そうだな、用事があって掛けてきたんだよね』

その瞬間、明るかった少女の表情が怯えに一転する。混乱するばかりだった私の頭に、一つの情報が挟み込まれる。

(生まれつき体が弱く、療養の為此の春に)

走らせるわけにはいかない。

柚子を抱き上げ、私は雑踏の中へ飛び込んだ。

出来るだけ、人の多い場所を走る。

ぶつかりながら、謝りながら走る。

柚子が震えながら私にしがみつくのは、逃走に対する恐怖か、追つ手に対する恐怖かはわからない。

(兄さん……、そうだ、兄さんなら)

何か、事情を知っているに違いない。

落ち着いたら連絡を入れよう。

だから、今は只管に走る。電車道路に沿い、臨時で展開されている屋台、家庭で楽しんでいるパーペキューを通り過ぎていく。

毎日のように自転車で大学へ塾へと片道三十分以上を走り回っている若者の体力を侮るなかれ。市役所前の電停を過ぎる頃には追手の声は聞こえなくなっていた。

「せんせい、はやーい！」

「乗り物の類じゃないから……」

荒い呼吸で返しながら、楽しんでいただけだったら何より、

「柳田柚子ちゃんのお父さんって一緒に函館で暮らしているんじゃないんですか？」

『ああ、話しなかつたか。複雑な家庭でね、あまり公言するものでもないと思ってなあ。今は母子だけで戻ってきているんだ。何かあったか？ 塾へ電話でも？』

「いや、それが——……柚子！」

話し込んだといつても五分と経つちやいない。

充分に人混みに紛れ、悪目立ちするような行動もとつていなかった。

なのに。

「せんせい……」

背後から、五十絡みの男性に羽交い絞めにされた柚子の手から氷イチゴが落ちる。

周辺に悲鳴が響いた。

救急車、誰かが叫んだ。

(三)

小児喘息による発作だという。

救急車で運ばれた柚子は、救急病院のベッドで眠りに就いていた。

頬に幾筋もの涙の痕を残し、疲れ切った表情の岬さんが

病室から出て来る。

「智恵子ちゃん、大丈夫だったか」

私の横に座っていた叔父が立ち上がった。

柳田智恵子。それが、岬さんの本当の名前だった。

そして、その隣に居る全く見覚えのない男性が、彼女の夫であり柚子の父親であるという。やや小柄な、人の良さそうな男性だった。

事情は、柚子を攫おうとしていた男からある程度は聞いていた。その男は、待合室の端で一際小さくなっている。

「この度は、大変なご迷惑を」

知らない女性の表情で、母親の表情で、智恵子さんは深々と頭を下げた。夫という人も同様。

「主人は、東京で老舗の呉服問屋の長男です。……私は見ての通り……授かった子は柚子ひとり、それも丈夫な体とは言えません。跡継ぎを、という声に押し出されるように郷へ戻ってきたのが今年のことです」

「その間に、両親親戚を説得するつもりでした。智恵子は、ずっと家を支えてくれていた。居なくなったことで存在の重さを知ってくれば良いと。柚子にも、函館の空気は良いに違いないと」

「都合のいい厄介払いにしか思えなかった！ 引き留めもしないで……、連絡の一つもくれないうで……」

掠れた声で智恵子さんは反論した。

智恵子と柚子の顔を見たくて声を聞きたくて、気づいたら飛行機に飛び乗ってました」

「高かったでしょう、この時期の旅費は」

真顔で叔父が切り返すものだから、苦笑いが広がる。

「ええ、本当に……。それでも、逢いたかった」

「『函館空港に着いた。今から行く』だなんてメールが突然、届いたんです。てっきり、逃げ場を封じて離縁の話かと……」

「驚くほど信用が無いな、僕は」

「貴方の事は信じていても、貴方の家族を信じられなかったのよ。悪い方向にばかり考えが巡って……。橋先生は今日は大切な用事があると伺っていたから柚子は預けられないし」

柳田氏と会うのなら二人きりで、と考えていたのだから

もしも離縁を言い渡され、母子共々切り捨てられるならそれでいい。万が一、娘の柚子だけを連れ去られては堪らないからという考えからだったそうだ。

しかしそうなるかと、今度は一人にする柚子が心配になる。

「それで私だったんですか？ でも、『連れて逃げて』とは……」

もつと他に説明が在ったろうに。

「慌てていたの。もしかすると柳田の家から、柚子を攫い

「連絡をよこさないのは智恵子もだろうか？ 居心地のいい故郷で、昔馴染みと楽しくやっているのかと思えば僕には何も」

「楽しい？ ……ふざけないで！」

「落ち着いて、ええと、柳田さん」

慌てて叔父が仲裁に入る。

「初めまして、橋です。智恵子さんが中学生の頃、塾で講師をしていた。その縁で、今は柚子ちゃんの勉強を時々見ています」

「ああ……。あなたが『先生』ですか。お話は伺っています」

名刺交換をする二人を、私はぼんやりと眺めるしかできない。

その後ろで落ち着きを取り戻した智恵子さんがこちらに気づき、もう一度、頭を下げた。

近くにあるファミリレストランまで叔父が車を走らせ、そこでゆっくりと互いの話を聞こうということになった。

誘拐紛いに柚子の発作。無事に済んだから良かったものの、危ない綱ばかりで『はい、さようなら』で納得できるわけもなかった。

「ようやく両親を説得できて、少しだけ暇も貰えて……」

に誰か回されるかも知れないって……。柚子には、親の事情なんて関係なく、祭りを楽しんでいてほしくて」

「ご期待に添えず」

がくり。私は首を垂れる。

果たして柚子を攫いに……と言えば人聞きが悪い、彼は

柳田氏の父方の親戚だそうで、函館観光がてら遊び相手を務めようという緊迫感のない行動だった。

智恵子さん曰く『そういうデリカシーに欠けるところが嫌なのよ、柳田の家は』とのこと。

言われ、その人は更に小さくなる。なるほど、柳田家のヒエラルキーがなんとなく、私にもわかる気がした。

「ふふつ、先生にはお世話になりました。期待通りよ。お祭りを柚子に見せてくれてありがとう」

「それって」

「学生さんだったらタクシーで行けるところまでなんて、しないでしょ？」

「してたらどうするんですか……」

本日何度目かの、血の気が引いた。

「柚子ちゃん、無事だったから良かったものの……」

「そういうところも」

「え」

「先生なら、柚子を守ってくれと思うたの。最悪の最悪は回避してくれるって」

「それって」

「ナイショ。そう言うように、智恵子さんは……岬さんは、私にだけわかるように片目を閉じて見せた。」

嗚呼。

砂山の裾に横たわる流水を、真夜中ながら探しに行きたい。

(四)

函館の、夏は短い。秋は早い。

益が過ぎ、九月が来れば風の色は一気に変化する。

柳田家の騒動から一ヶ月以上が経ち、叔父の結婚式も一週前に恙なく執り行われた。

秋晴れの海峡の向こうに本州を見ながら、柵にもたれかかり私は深く息を吐きだす。

怒涛だった。

大切にしていたものがドミノ倒しの如く崩壊していくかのように感じ、大きく心を揺さぶられたのも遠い昔に思える。

結婚し、妻の実家である民宿を継ぐと決めた叔父が実行に移すのは、これから三年後だという。

強い風が、彼女の髪をさらい、表情を隠す。

「二度目です」

風に消えてしまえばいい、そう思いながら私は呟く。願

いは虚しく、言葉は彼女の耳へ届いたようだった。

岬さんは私の隣に並び、海峡を眺めた。

「貴女が失恋をしたのは、これで二度目です」

重ねて言うと、『知っていました』と岬さんが笑う。

「私も二度目なもの」

「叔父ですか？」

「はい」

過去の話であれば、こんなにも気持ちが楽になるのか……

…開き直りなのか。

本当は、完全に過去になんてできていないけれど『そう

する』真似なら出来る程度に。

「ずうっと昔、ね」

肩を竦めて、恥ずかしそうに笑って見せる。「淡い初恋

だったわ。誰に相談するでもなくって……。そういうもの

だと、思っていたの」

視線を落とし、岬さんは自身の下腹部をそっとさすった。

「今の夫と出会って……袖子を授かって。その時に、冷や

りとしたの。このままで良いのかって思ったの。良いも悪い

もないのにね」

それが、六年前。

別居中の柳田夫妻だが、娘の柚子ちゃんの喘息が落ち着く頃合いをみて……。早ければ来年の小学校入学に合わせ

て東京へ戻るのだという。

もしかしたら、数年はこちらで過ごすことになるかもしれない。

変化は確定していても、至るまではゆっくりだ。

ゆっくりと思っても、過ぎてしまえばあつという間

なのかもしれない。

浮いたり沈んだり、押したり引いたり流れたり流された

りしながら、これからの時を過ごしていくのだろう。

そうこうしている間に、私も大学を卒業し、自分だけの

進路を決める日がやってくるのだ。

今は『たちばな塾』の『若先生』として、充実した日々

々を送ることを大切にしたいと、そう考えている。駆け込

み寺ではなく、未来へ進む為の足掛かりと出来るように。

「岬さん」

風の音、波の音に紛れる気配に気づき、私は振り返る。

「先生は、まだ、そう呼んでくれるの？」

芝居があったように岬さんは小首を傾げた。切り揃えた

黒髪が、さらりと頬に揺れる。

「岬さんだって、私をまだ、先生と呼ぶでしょう。おんな

じです」

私と岬さんが出会った……。そうか、あの頃には既に。

橘の姓、柚子という名。その頃は、思いを消しきれてい

なかつたと、そういうことだろうか。もしかして柳田氏の

疑念は、そこから？

「そして、先生に出会ったのよ」

嗚呼。

かちり、かちり、失われていたパズルのピースが填めら

れていく。

何も知らなかつたあの頃。

何も知らないままに、岬さんへ恋をしていた私を、彼女

はどう見ていたのだろう。

「楽しかつた……。嬉しかつた。学生に戻つたような気がし

て、もう戻れないのだと思いつて」

遠く、柚子の音が聞こえる。

岬さん呼び、私を呼ぶ。

遠い過去から、戻る時間を教えている。

「戻る必要もないって、今、両の手にあるものを大切にし

ようって、背を押してくれたのは先生なのよ」

「……え？」

その意味を問おうとした頃には、私たちの姿を見つけた

袖子が駆け寄ってきた。

「もうっつ さつきから、ずっと よんでるのに！」

「ごめんなさいね、先生のこと、ちよっとだけ借りてたの」

「岬さん」

「行きましようか」

「……はい」

昔話は、おしまい。

私達は冷たくなってきた潮風へ背を向けた。

「せんせい」

狭い歩幅で一歩懸命追いかけて、袖子が私の手を握る。

小さく、白く、しかし力強い手をしていて。

上気した顔で、私を見上げる。

いつにない気迫のようなものを感じて、思わず私は足を止めた。

「あたし、せんせいがすきよ」

あの時、誰もが言えなかった言葉。

まっすぐに、こちらを見つめ返してくる瞳に、何も言えなくなってしまう。

「うん、そうだねえ」

「もう！ こっちをむきなさいっ」

濁した答えしか持ち合わせない私に、純粹な袖子が怒る。

嗚呼、きつと、こんな時間も、たちまちのうちに流れて

ゆくのだろう。

砂に書かれた指文字をさらう波のように、淡い跡を残して。消えない跡を残して。

夏のそれより僅かに色褪せた海面が、光を弾いて輝いていた。

袖子と手を繋ぎ進む先には、母親の笑顔をした岬さんが居た。

あの日の岬さんの背を押したのが私なら、今の私の手を引くのは袖子だ。

初夏から秋へ、目まぐるしく季節が移ろう図書館の街で。

六年前のあの時のように、あの時とはまた違った軌跡を描き、想いは連なり、先へ、先へ。

(了)

## 選評 安東 璋 一

きびしい予算縮小の影響は市民文芸にも及び、作品集の公刊費が削られた。由緒ある市民文芸の灯は守りたいと、ホームページでの公開のほか、図書館手作りの作品集を限定作成するという当事者の努力に敬意を表したいが、小さな予算を削ること、歴史的な魅力ある文化都市にふさわしい風土と人を育てることの意味をどう考えるか、街づくりの観点からも当局の再考を願いたいところである。その意味でも小説9篇評論3篇とこの部門では近年でも上位の応募作品があったことは心づよい。また小説では10代から20代30代50代と、高齢化する市民文芸の中で比較的若い世代の応募が目立ったことにも注意したい。

その小説は筆力の均衡する作品が

何篇か揃ったが結果的に二つの作品に心が残った。

入選は鳥崎彩佳「**勇氣の声を振り**

**紋れ**」大学生の作品。高校の午後の時間で古典の授業は枕草子。教師の単調な声に誘われて「おれ」の思いや回想がひろがる。同じ教室の幼なじみの女子のことや、その子に思いを寄せる同級の男の友。「春はあけぼの」で始まる四季の風情を書いた原文を引用しながらエピソードを書く。

友から彼女を好きだと告白されたのは入学間もない春。当の彼女からおれが好きだと告げられたのは夏。いまおれがそのことを考えている授業時間は秋の午後。おれは彼女に対する自分の思いを振り払うように、おれには別に好きな女の子がいると友達に言う。その好きな女の子とは――

思春期の微妙に揺れる友だちや異性への思い。枕草子四季それぞれを文を枕にした語り口がなかなかなかぎよく、エピソードの使い方も軽

いけれど心に落ちる。冬はつきづきしの文を引いて終る着地もいい。ちよっと書き足りない感じはあるが、青春の哀感をさりげなくにじませて、若い作者のセンスを感じさせる佳篇。

佳作佐藤千代美「**たちまちのうちに**

」ここにも移りやすい青春への思いがある。兄と呼んで慕う若い叔父の学習塾を手伝う大学生の私が、中学生の時に出席して忘れられない年上の女性と、その思い出のある立待岬で再会するところから話が動く。女性にはわけありの人妻で叔父は彼女の初恋の人だった。そんな事情が、彼女の小さな娘と一緒に港祭りでまきこまれた騒ぎからわかってくる。白いレースの日傘の女性と啄木の歌、立待岬というちよっと定番すぎる出会いの情景や後半の忙しい話の展開など、ひと工夫欲しいところだが、たちまちのうちにという題名も、立待岬とたちまちに過ぎてゆく青春の時間を重ねているのだろう。年上のひ

とへの慕情、叔父との時間の快よさも、函館の短い夏のようなひとときとして過ぎてゆく。落ちついて整った語り口でそこに漂う情感が心に残る。

以下の二篇は入賞には足りないがそれぞれ見どころがあった。「**鈴蘭**」は貧しい母子家庭に育った青年が持つて生まれた絵の才能を、先生や職場の上司に認められ、自分の夢を理解する恋人にも励まされてパリ留学へ旅立つまでの話。かなりの分量になりそうな話を所定の枚数で後味良くまとめた筆力は認められるが、その分説明的にならざるをえない話の運びが小説の現実感を弱くしている。

「**木こりの選択**」は人口百人の山村の木こりが、村を救うため山の精霊の力を借りて町に通ずる山道を塞いでしまう話。寓話としてシンプルにまとまっているが、それだけに劇的な面白味が乏しい。しかし限界集落など現代の過疎化する地域社会へ

の寓意も感じられて着想と筆力に興味をひかれるものがあった。

「**真夏の白雲夢**」。乳がん検診を受けることになって小学一年生の時の心痛い思い出が白昼夢のように蘇る。その場面がなかなか印象的に書けている。その記憶を中心に少し話を掘り下げたかった。「**ジ・ゲン・バクダン**」は高校生の作品。東日本大震災で母を亡くした大学生が人の夢を叶える仕事の超能力者への力で日本中の原子力発電所に爆弾を仕掛ける話。意図はわかるがこういう話は細部のリアリティが必要。それが書けていない。

中学生の作品が三篇。「**三国志の如く正義と戦**」学級グループの対立を三国志に見立ててドッジボールで争う。他愛ないけれど面白かった。

「**大きな傷**」はいじめ問題、「**魔女の館**」ゲーム感覚の探検話だが文章も作品のかたちも稚い。よく書くことはよく読むこと。まずそれを実践し

てほしい。

評論。水間清「**啄木の診断書**」が抜けていた。病苦と生活苦の中で死に至る石川啄木の最晩年、明治44年（45年）の病状と生活を医師の目で臨床的に追いながら、とくに死因とされる結核症の経過について、新知見を得たと書いている。専門的な知見の理解は当方にも十分ではないが、以下のようになるが、

明治44年2月啄木は東大付属病院で結核性腹膜炎と診断される。結核性の症状はこれが初発と考えられているが実際は、啄木16才時の上京で体調を崩した時すでに感染していたのではない。当時の生活や東京の居住環境、一般的な結核の蔓延事情を作者は詳しく考察する。その後帰郷療養して免疫機構が回復、発症は抑えられたが、最晩年劣悪な東京生活で腹膜炎を病み発症したと思われる。腹膜炎は胸膜炎に移行し、啄木

は発熱や胸の痛みに悩むが45年1月母カツが肺結核で咯血。妻と共に啄木も感染して4月に世を去る。死因は肺結核とされるが、作者はその死因にも検討の余地があると指摘する。肺の病変より、腹膜炎から胸膜炎を併発する結核性の病変により注目するからだろう。その意味でも「呼吸すれば／胸の中にて鳴る音あり／風よりもさびしきその音！」45年2月の歌の解釈は、心に残るものがあつた。

医学的な記述の部分の硬さわかりにくさはやむをえないが、啄木の日記や書簡などに親しく接して臨床的に啄木晩年の生活と病を描く文章には他にない精彩と迫力がある。日記文学としても啄木の評価は高いが、その一端はその苦境を生々しく伝える最晩年の日記にある。作者の評論はあらためてそのことを気づかせてくれる。啄木没後百年ゆかりの好評論。

他の評論二作は残念ながら力劣つた。

「**検証旧軍隊と巨艦隊といじめ**」旧軍隊の検証として徴兵検査単人勅諭内務班などをあげるがいずれも項目的な紹介だけで、沖繩戦の記述は多少詳しいが一部断片的。自衛隊の段は作者自身の体験など興味深いところもあるが断片的に終わっている。検証とあればもっと掘り下げてほしい。昭和末期の文藝より」作者退職時の昭和60年前後の文芸作品13篇の評論。それぞれの作品についての踏みこんだ筆致に作者の文芸に対する見識がうかがわれるが、なぜいまこれらの作品なのか、その意図やテーマが見えない。恣意的な作品感想にとどまっているのが残念。

今年四月、妹が札幌の病院で亡くなった。満七十二歳。その内、五十年は病院生活であった。

今なら、「心の病氣」と格好を付けて言うのが殆どだが、ずーっと「精神科」に入院していると言われるのは隠していた。

二人だけ残っている姉弟の弟が言う。

「家族間の確執の犠牲になったんだ」と。

私が満四歳の時実母が屍産で亡くなり、二年後、後の母さんが来た。当時、森町に住んでいたが、朝もやの中玄關前で待っていた私の前に、父に連れられて現れた母は美しかった。

祖母の手をぎっしり握っていたのに、後ろに隠れてしまった程驚きと、恥ずかしさが混ざった気持ち今は今でも忘れない。

学校の先生だったから、先妻の残した子供の私や兄にも優しく、リップに育てなければと心に決めてきたそう。だ。(後で知りあいの人が教えてくれた)

か聞けないでしょ」私は納得。

処が、次の日妹をおんぶして参観に来た。勿論一人だけ。子供たちは「エッ!」という顔をした。「お忙しくて昨日来れなかったからでしょ」先生が言ってください。その後の参観日いつも次の日だ。ずるいと思った。

戦中なので始業時「黙祷」と声がかかり、目を瞑る。「ネンネ。ネンネ」と妹の声。子供たちはブツと噴出す。私は恥ずかしかった。

「あの時の妹さんの声可愛かったね」婆になった今でも同級生が覚えていてと言う。

又二年半後弟が生まれたその頃、父が勤めを辞めて開業獣医師として独立した。

まだ馬が機動力の主力だった頃なので、ものすごく忙しく母は助手。私はお守り専門。オッパイもゆつくり飲ませてもらえなかったのか、お腹が空いた弟が這い這いして「猫マンマ」を食べているのを見たときは驚いた。この話は、その後大人になっても、今でも笑い話にできる。

過酷な時を過ごし、生活にも潤いが出来た頃から母が変わってきた。

当たり前のことも知れないが、自分の子供だけを可愛がる。私の国民学校卒業後のことは何も関心がないみだだった。兄が難聴で函中(今の中部高校)は入れな

いつまで祖母がいたのか覚えていないが、慣れるに従って私も安心して懐いていた。

二年後生まれた妹は母親似で可愛く「テンブルちゃん」と言われて、引つ張るどころ。

私はみったくないほうだったので、妹が皆に持て囃されるので悔しかった。

小さいうちに母親を亡くして、可哀そうと言われて祖母に甘やかされていたので、余計つらかったのだった。

お守りをすると言われ出しては、放ったらかしたりの意地悪もした。

よちよち歩きでべそをかいて家に戻る妹を抱き上げる母をジロつと見ている私は厭な子だった。

授業参観日はその頃もあってその日母親達は一張羅を着て教室の後ろで見ている。

子供が帰ってから成績のことや、話合いがある。私の母はいつも居ない。

「どうして今日来なかったの？忘れたの」  
「大勢なら話合いが長くなるし、一人ひとりの成績なん

いので、私を庁立高女に入れ、女医さんになりたいと考えて一生懸命勉強するように仕向けたのは、父だった。

女学校は無事入学が出来、手続きや入学式の案内も来ていた。入学式の日、いくら待っても母は弟をおんぶして台所にいる。

「お母さん遅れるよ」と私が大声したら、

「アラッ！私が行くの？」と言うのでビックリ。

「父兄同伴で書いてあったっしょ」

「お父さんが行くもんだとばかり思っていたから」それでも着替える暇もないし、おんぶしたままで付いてきた。戦争中でも晴れ着のお母さん方が多く、恥ずかしかった。

その時も、その後「私は(母)女学校には行けなかったんだよ。あんたはいいね」

どうして女学校に行かなかったのに、先生が出来たの？と思つたが、聞けなかった。

(後で三浦綾子の小説で、別の方法があったことを知った)

この時からか翌年の妹の小学校は、良い学校に入れようとしたしだ。

師範学校(今の教育大学)付属小学校に入れたくて、母がやつきになりだした。勿論試験に受ければ何も問題がないのだが、あらゆるコネを遣つて運動をしているの

で、家も留守勝ち。女学生になって、た私は父の助手。馬主だけでは抑えられない時「鼻捻り棒」で鼻を括った棒を力一杯引つ張るように言われ、とても恐ろしいと思ったりもした。

「母さんは？」父が聞いたので「学校のことで何処だかに行くと言っていたよ」

「行く、困ったな」と父がぼやく。

母の運動が効いたわけでもないだろうが、妹は優秀な成績で付属に入学した。二年後弟も入学できた。「あまり頭が良くなかった俺は、姉ちゃんのお陰で入学出来た」が弟の弁。

成績もいつも比べられて厭だったそうだ。

二人の子供が付属に行つてから母は、学校の仕事や役員ばかり優先した。

終戦後で食料も不足がちだったが、職業柄主食や野菜が手に入るので学校の先生の自宅に付け届けに終始し、お使い役は私だった。

妹は確かに物覚えがよく、可愛い顔をしているし、学校でも人気者だったらしい。

八歳も離れているのに私は妹が褒められるのが悔しくて、意地悪をする。何か忘れたがストーブの前で「そんなに私をバカにするなら、そのハンカチ燃やしてやるから」と妹が大事に手に持っていたのを、引つたろうと

したら、妹が自分でストーブの扉を開けて燃やしてしまいい、「美つちゃんが意地悪した」と大きな声で泣いた。この声で父母とも寄つてきたが、父がいきなり私の頭を殴った。はじめてだったので驚いたが涙は出なかった。

この時の母は冷めた目で見ている何も言わなかった。

この少し前から私のことで、父母の間はうまくいっていないことは感じていた。悪くなることは必然だとして

父の居ない時だけにチクリ、チクリと意地悪さをしていった母だったが、この後は父がいる時でも見せるようになった。後で兄に聞いたことがあるが、自分はまだ意地悪さは感じたことが無かったそうだが、私と妹が同性だったことと、兄は早くに仙台の薬専に行つて、あまり帰省しなかったらだろう。

女学校が新制中学に変わり、高校になり最後の一年間だけ男女共学になり、私はなるべく家に居ないようにしていた。

元男子校だった所へ編入された私の担任は若く、女の生徒の進学にはあまり熱心でなかった。父が希望した医専へ進学は学力で無理と一蹴されたし、家庭でも変な金融に騙されて、余裕がなくなっていた。

かなり裕福な家のお嬢さんでも、進学で函館以外に出すのは躊躇する時代で、洋裁学校など花嫁修業をさせられて、良い家に嫁ぐのが普通であった。

進学もできず、勤めるにしても出遅れ、父が見つけてくれた役所の臨時事務員に一年勤めながら、夜間の洋裁学校に通った。契約は延長できたそうだが、洋裁の仕立ても出来るようになり小遣いが自由になったので随分楽になった。これも父母の諄い種だった。

この頃から同期生たちは結婚しはじめ、進学は駄目でも、良い家の嫁になら東京でも何処へでも出すのが見られた。

私は家からは離れたが独り立ち出来るほどの経済力も無し、自分で得る資金で次々と習いごとをして、友達に子供が出来ると通信教育を受けさせた。何でも良いから資格が取れ、それで勤められ自立し家から離れることが一番の希望であった。四年制は続かないと意味が無いので、短大を選びさらに行けたらその時考えることにした。頑張った甲斐があり、二年間ピツタリで短大保育科を卒業でき教諭の資格も取れホツとした。

市内のカトリック系幼稚園でボランティアをしているら、同じ系統の所から来て欲しいと言われ面接に行った。「今は信者より資格のある人が欲しいので採用しますが、必ず信者になること」と言われたが即答は避けた。父に報告したら

「ハイ、信者になります。と言えばいい」「これは一生の問題なんだよ。止められないんだよ」と

勤めないことにした。直後、手伝っていた所の先生が、「妹が八雲のマリア幼稚園に勤めているが、体調不良が続くので辞めたいと言っている。もし、貴女が行く気があるなら伝えるが」と言ってくれた。信者の件を聞いたら

「妹もそうでないし何も条件は出されなかったよ。私だつてここに三年いるけど信者になるように薦められたことないよ」決めよう。

何より家から離れられるのが一番嬉しい。推薦してもらい、早速面接に行った。八雲に下車するのは初めて。大きな外人がいる。

「へー、こんな田舎でも外人いるんだ！」と驚きながら探し、幼稚園の隣の普通の家に教会の看板を見つけてベルを押した。その時

「あの一、面接に来られた先生ですか？」と後ろから声を掛けられた。さっきの外人だ。

私を迎えに来ていたそうだが、声をかけなかったという。道を尋ねる様子などを見て、採用は決めていたそうだった。グロード神父だ。

幼稚園は楽しかったし、その後野外劇も手伝つたり一生の付き合いになり、昨年十二月二十五日亡くなられた。

「冥福を祈るのみ。父がやたらに見合い話を持って来るようになった。早

く母と離すのが一番良いし、それも結婚なら目出度し、目出度しなのだから。

母が「私が縁談を探してきて進めたら追い出すみたいだし、口を出さないと構わないと言うだろうから、やり切れない」とよく言い、又父母が争う。見ていて結婚は厭だと思ふ。

義理だから形だけでも見合いをしてくれと、引っ張りだされたこともあるが、相手には失礼なことだ。自分にその気が無いのだから、態度で分かるのだろう。殆ど断られたし、私も断った。一生でもマリヤ幼稚園なら居たい。

妹は高校二年の頃から不登校になっていた。

原因は進学問題からで、成績が良かったので国立一校を薦める母、父は私で果たせなかつたので、私学でもいいから医科大学を目指せ、本人は音楽大学以外行きたくないといふ。

ピアノがあつたわけでもないし、何処かで弾かせてもらつて好きになつていたので、私は知らなかつた。その程度では音大は無理なことは知つていたろうし、口にも出せないでいたのだから。成績は下がる一方、休むので進級も危ない。やつとお情けで卒業できた感じだつた。家に閉じ籠り何もしないでじつとしていた。

母が宗教に走るようになったのはこの頃だつた。

に電話をして引き取つてもらふことになつたが、母が着くまで二日間学校の方と知人には大変迷惑をかけてしまつたらしい。

母と妹はその足で奈良県の宗教団体に、長期間泊り込みで修行する行事に参加していた。

のんびり観光をして帰つた実家で、このことを父に聞かされた。母には相当叱られるだろうから、妹たちが帰つてこない内にと、休みを残して八雲に逃げ帰つた。二日後、帰つた母の第一声は「美つちゃんが薦めたから良いかとやらせたが、勉強は無理どころか集団生活は全然出来ず、大変だつた」そう

だ。母は相当に妹に期待するところが大きかつたのだろう。やつと自分の娘の本当の姿を認識できたのかも知れない。今まで病気かもしれないなど考えもしなかつたらしいが、病院探しがはじまつた。薬剤師になつていた兄の手配で何箇所か話を聞きに行つたし、嫌がる妹を連れて診てもらいにも行つたそう。

「お母さんの期待が大き過ぎて神経が参つたのかも知れないね。入院して薬を飲みノンビリ過ごさせて様子を見ましょう」

今なら、ノイローゼと病名がつくのだろう。精神科入院。

妹が少しでも明るく過ごせるようにさせたいたので「信ずる者は薬をもつかむ」氣だつたろう。

妹たちが通つていた幼稚園がカトリックだつたし、付属の担任が信者ですごく良い先生だつたことも影響したか、最初はカトリック教会に宗教の話を聞きに行つただけで期間は短かつた。

仏教は檀家だつたから、月参りに来るときは仕方なかつたが、あまり熱心でなかつた。

金光教や仏教の別の宗派にも、占いに頼つたこともあつたが、効果が無かつた。

私は環境を変えるのも一つと思い、自分の卒業した大阪の短大で通信教育を受けるように薦めたら、やつてみる氣になり勉強をしように見えた。夏休み中にあるスクーリングに行くには少し心配だつたが、知人も入学して行くので、世話をしてくれると言つた私が付いて行くことにした。

どこから見ても普通の人に見えるが、気持ちにむらがあることは、事務局に伝えたくえで入寮手続きも無事すんだのも見届けたし、知人に任せることにして、折角来たのだからと私は四国観光に出かけた。

後で知つたのだが、寮に泊まる時になつて暴れだし、宥めようとした知人の腕に噛み付いたそう。携帯電話がまだ無かつたし、私に連絡は取れない。仕方なく実家

函館市立病院の精神科は、深堀町の電車道から入つた所で、今の国立病院の裏駐車場あたりだろうか。

母と初めて見舞いに行つた時は、ドキドキしてしまつた。女性室より先に男性の部屋の横を通る。裸や着膨れや色々の姿で窓にへばりついて私たちの通るのを見ている。鍵のかけられた入院室には係りの人が付いて行つて、中の看護婦に見舞い人を渡し時間を制限されて話をする。独特の臭いのある部屋で大声をあげている人もいるし、ジロツと見る人もいる。

近寄つて触ろうとすると、看護婦が「〇〇ちゃん自分のベッドに戻りましょうね」と優しく言う。十人以上いたのでないだろうか。私は「元氣になつてね」と言うだけだが精一杯だ。

ある程度治療をして効果が見えないと、病院が変わるらしい。何箇所か変わった。

でも見舞いは自由には出来ないのは同じ。面会室に病人を連れてきて話をさせる。係りは付いていないが隣室で見ている。こういうのが一番多い。見舞いの食べ物には本人に直に渡されない。係りが預かつて食べさせるそう。ソックスを持って行つた時「良かった穴あいてしまったの」と踵を見せた。喜んでくれて嬉しかつた。こんな時はいいが、「ああ、美つちゃんかい、今日は用ないよ。忙しいんで

しよ、早く帰んなさい」と言われることもある。市内でなく近郊の病院に移ってからは、なるべく行かないようにした。

この頃から母が、離れている私にも今までより少し優しくなったような気がした。

妹に向いていただけが、他にも気を回せる様になったか、努力していたのかわからない。

八雲に行つてから二年。初め園内の住み込みだったが、修道女の主任が住むようになり近くに自活の家を借りた。

相変わらず見合いの話が届くが無視した。

ある日、友人が「お母さんに頼まれたから」と、見合いの話を持って昼過ぎ訪ねて来た。「勤務中だから、家で待っていて、なるべく早く帰るようにするから」

「どんな良い人でも、今は結婚する気は無い」と話も聞かず追い返した。釣り書きだけは置いていくからと、シヨンポリ帰った友は乳飲み子がいるのを、母親に預かつて貰つてまで来てくれたのに申し訳ない。

又半月して、夕方突然母が幼稚園を訪ねてきた。この前の友人に頼んだ話をぶり返す為だ。

勤務が終わつて、不得意なピアノの練習中だった。修道女に案内されて遊戯室に現れた母を見て私はビックリした。

「あんたピアノノ上手なんだね。結構きれいに聞こえたよ」通信教育二年目のスクーリングでは、指定の楽譜と番号まで終わっていないと、実技で落とされるので、必死だった。

女子大に行った友のピアノを弾かせてもらいに行き、独学で頑張つて独習したことは母は知らない。この前、友が来てくれたが断つた話の事だ。母がこんなに私を構うのは驚きだった。

「相手はもう一度誘ってほしいと言うので、伝えに来た」それだけ言うかと挨拶もそこそこ最終列車で帰つていった。

シスターに何事かと聞かれ、仕方なく話をした。新学期が始まったばかりだし、新しく長万部に出来た分園に移つた先生もいて、今私が辞めるわけにいかないこと。本当は母の薦める話にはのりたくないことを話す。

主任は「折角の話だから、頭から反対しないで考えて御覧。先生のやりくりは何とでも出来るから」説得されてしまった。

今までも今回も結婚はしたくないと言いつながら、釣り書きを見ると気になるから見ないでいた。これほどに言われるなら見よう。相手は千歳市の三十三歳の陸上自衛官。いい歳の小父さんだが私も二十八小母さんだ。

履歴書の他にコメントがついている。自衛官は定年が早く自分の階級なら五十歳。直ぐ結婚して子供が生まれなくても、成人まで届かない。両親は幼い時亡くなり、兄二人が東京にいて。両親がいて健康な女性で職業を持つている人なら誰でも良いとは、失礼だが思っていた。世話をしてくれる人は上司だけが、これは避けたい。時々行くバーのオーナーが函館出身で、父親が知人に娘を嫁にもらつてくれる人がいないか、紹介をして欲しいと言われたそうで、自身の自衛官ならウヨウヨいるだろうから、と回つてきた話だと書いてあった。コメントを読んでも興味を持った私は、話をしてみたくなかった。

住所も書いてあったので、手紙を出した。

誰とも結婚願望は無いが、面白い考え方をする人だと思つたと書いた。ペンフレンドみたいな二三次やり取りの時、妹が精神科入院していることは両親は隠せと言うが、知らせたし母ともうまくいっていないことも書いた。

それでも会いたいと言うので、見合い前に先に会うことにした。

土、日曜かけて来ると言う。千歳から急行で八雲に止まつた時私が乗り込む。話をしてみて厭だったら見合いはすつぽかす予定。雨が激しく降り混んでいて、結局函館駅についてから喫茶店で話をした。真面目すぎるくら

いだが、時々ユーモアがある。私の方が傾いていった。翌日私の家に来た時は一人とも初対面の振りをしていた。帰りに八雲まで一緒に行くことしたら、一汽車早いので帰つたそう。振られたらしい。

一人で考えてみようという時間にしたとは後で知った。千歳に来て自分のいる所を見て欲しいと言うので行くことにした。

主任には結婚するかも知れないと伝えた。汽車に乗るため八雲駅に着いた直後、息を切らせたシスターが上履きのまま走つてきて、

「今、お母さんから電話で是非決めてくるように、主任さんからも勧めてください」と言われたので伝えにきたそうだ。

千歳で制服姿で歩く時は敬礼をすること等、きよろきよる見てばかり。下宿の部屋は綺麗で塵一つ無い。私の家のほうが汚いだろう。

夜、実家に電話で結婚をすると伝えた。随分駄々をこねたがあつてなかつた。

転勤族の自衛官であちこち歩き定年で函館を永住の地にしたのは、父が自分の家の一軒置いた隣に土地代を肩代わりして用意してくれていたから。無利子にしてくれたので助かり、早めに払い終わって、直ぐ家を建てた。年取つた母もあまり意地悪でない。

父が先に亡くなり、母が札幌の弟の家に引き取られる時、近くの知り合いが「お母さんが家を買って欲しいと言ってきたが、本気だろうか？」と、聞きに来た。

何の相談も受けていない。父の建てた家の方が小さく作りが良かったので欲しかった。

私は子供たちが巣立って夫婦二人だけになったので、そちらに住みたかった。同価格で譲ってもらえると思っていたのは甘かった。

「あなたが欲しかったのかい」駄目と言う。

最後の確執だろうか。

弟の家でも義妹と色々あったみたいだが、弟が毅然としていたから立派だ。十年一緒に住んだ母は脑梗塞で倒れ、病院に運ばれた。八日間一度も目を開けずあつてな世を去った。八十五歳。

私だけが居合わせたのは運命なのだろう。

前夜私のふとんが重く身動きが出来なかったと言うと、母の霊がお別れに来たのだと弟が言い「俺の所の何故来ないんだ」悔しがる。

母が札幌に移って直ぐ妹も移っていた。

「母さんが死んだよ」と知らせても、分かったかどうか。

「ふーん」と言うただけだと、弟が嘆く。これからは弟がみるようになる。

精神科は費用がかかるそう。父が死んだ時、予想できたので私は遺産相続は放棄した。

母が亡くなって十五年、妹も年を取った。

長い間主婦をやった私に比べ、お姉ちゃんみたいすべすべした手や皺の無い顔は綺麗だ。

最後が近いからと知らされ駆けつけた私に、もう声が出なくなっていたが口の開き方で

「アリガトウ」と言ったのが分かった。ご苦労さんだったね。ゆっくり休みなさい。

妹、の四十九日に聞いたら、父の遺産はとつくの昔に底をついていたそう。そして又

「イツちゃん家の犠牲になったんだ」と弟は言った。

## ノンフィクション

### 入選 親友

高田 枝寿子

本当の親友とは、どんなものなのだろう。三十四年間生きてきたが、親友の意味がわからない。いろんなものをさげすむこと、それをすべて受け入れること、お互いに辛い時は慰めあうこと？それほただの幻想にすぎないと思ってきた。だって人は親友と言う言葉を簡単に使いすぎだからだ。親友と言いながら、平気で傷つけたり、裏切ったりする。

私は二十代の時、心の病を患って地域活動センターで同い年の子と出会った。2人で美術館へ行ったり、ピデオを貸してくれているうちに彼女は私を親友と呼んだ。

ある時、私や彼女への悪口をセンター内で聞き、それを彼女に話した。彼女は急に顔を真っ赤にして

「どうしてそんな嫌なことを私に言うの？そーいうの聞きたくない！」

とキレた。慰めあうこともできないのか。呆気にとられた。それから、私は気を使うようになった。彼女の部屋は数え切れないほどの人形やぬいぐるみをたくさん飾っていた。彼女の部屋だけ幼いまま時が止まっていたよう

に感じた。きっと彼女は汚ないものなど見たくないし、聞きたくもないのだ。私は、痛みは分かち合うものだと思っていたが、気を使うこと、それが親友と呼べるものなのか、私にはわからなくなった。

私たちは境遇も違った。私の家は母子家庭、彼女の家では年に一度は海外旅行を楽しむ家庭だった。遊びに行く時は千円もする昼食を食べに行く。OLでもあるまいし、働いていない私たちには不釣り合いだと私は思っていた。どこかで無理しながら、どこかで気を遣いながら、私は必死に彼女に合わせていた。それでも楽しいと本当に思っていた時もあったし、私にとって彼女はかけがえのない存在だった。そうして7年という月日が経った。そんな時だった。センターで私が絵の先生に無視されるようになった。全ては誤解だった。私はその頃書き留めた絵を片付けていたのだが、一番気に入っていた絵がなくなつた。先生も一生懸命探してくれたが見つからなかった。先生は何を勘違いしたのか、

「どうせ、お前が持っていっただろう！」と勝手に腹

を立て、私を泥棒扱いた。六十にもなる、また自分の絵を個展にも出すような立派な先生が私を無視するようになった。

必死に誤解を解こう、和解しようと先生が来るたび、私は話しかけた。

「すみません、ちよつて話せませんか？」

先生にとつて私は透明人間だった。それはとてもとも辛かった。そして親友と言っていた彼女は見ぬふりをし、庇うことなく、ただただ絵を描き続けていた。

私はもはや心身共に限界だった。何もしていけないのになんで聞く耳すら持たてくれないのか。周りの人間は何故誰も止められないのか、と。

そして私はついにタブーを犯してしまった。彼女のメールに

「死にたい」

と書いてしまったのだ。私は困らせてしまったことにすぐ謝ったが返信はなかった。何度メールしても無駄だった。最後に

「今のIちゃん、絵の先生と同じだね」  
そう打ったら

「ふざけんな、ばかやろう」

と書いてきた。私はメールアドレスを変えた。

絵の先生はやめさせられた。所長は、「せつかく絵を描

きたい人がたくさんいたのにな」と呟いた。

親友と簡単に使う人がいるけれど、それは違う。親友とは、互いを理解し、助け合い、補うもの、なにより一緒にいて居心地のいいものだ。私はそう結論づけた。顔色を窺っていたあの七年は私にはかなり重かった。今もよぎる。彼女の部屋の並びたてられた人形たち。無機質な中で暮らす彼女は生身の人間を心から愛せないのかも知れない。

今、文通をやり取りしている人がいる。母が入院した時はたくさん励ましてもらった。私が親たいと言っていたドラマをわざわざDVDに録って送ってくれた。

「私は頑張れとは言わない。だって貴方はもう頑張っているから」

と書いてあった。いろんなアドバイスももらった。言葉は間違うと暴力的にもなるが、時にとても優しい。私は随分と彼女に支えられている。

親友とは言葉に出さなくてもいつの間になつていくものなのかもしれない。

人の縁とは思わぬところにある。そんなことをふと思つた。

終

## ノンフィクション

### 入選 弟の死

大滝洋子

年が明けたら私の年、巳年を迎える。何かしらいい事があるようなそんな期待を抱いていた矢先弟が亡くなったと知らせが入った。

札幌に住む弟のお嫁さんからの電話である。

覚悟はしていたが一度持ち直したと聞いてもしやと期待も大きかっただけに驚いた。こればかりは年齢順とはいかないと知りながら二つ下の弟が先に逝くなんて悲しすぎることだった。私は暫く座ったままぼんやりとしていた。

その頃一週間程秋晴れが続き九月も半ばを過ぎたというのに気温が高く三十度を越える日もあり私は疲れ気味であった。

しかしその日函館は朝ザーザー降りの雨。久しぶりの雨に生氣を取り戻した一日であった。弟とは子供の頃から仲良しで思い出しても喧嘩をした記憶がない。七人兄弟の唯一男の子でそんな事もあってか遊びも小さい頃はままごと遊び等一緒にやっていた。元々弟は穏かな性格で一つ下の妹は少しきかん気なところがあり二人で何や

らやつてもメソメソするのはいつも弟の方であった。私は二つ上の姉とは良く遊んだが又よく喧嘩もした。何が原因であったか叩いたり叩かれたり部屋中走り廻り挙句のはて二階へ駆け上り十五畳敷きに置かれた机の周りをぐるぐるそして身をかわし又駆け降りるといったことだった。母の「もう止めなさい!!」の一声に疲れきった二人はあは……と笑ってケンカは終了。弟とはこういう事がなかったで寂しいと言えは寂しい。その頃蓬萊町に住んでいた私たちは青柳小学校へ通った。弟は旧制函館中学へ進み卒業と同時に就職した。それに伴い生まれ育った函館を離れて単身札幌へ、ここで定年を迎えた。

弟の送別の式は無宗教で行われた。元氣な頃から弟が希望していた事であったとその日お嫁さんから知らされ何故か弟らしいと私は思った。専売公社退職後は趣味で水彩画教室へ通い幅広い人たちの仲間との交流も多く、人に親われた様子で、講師であるその人の弔辞がその事をよく伝えていた。お別れの最後は旧制中学卒業以来札幌の地で親交のあった七人のメンバーに依る卒業学校の校

歌が歌われ式は終った。皆さん前へ進み弟の遺影に向つて歌つて下さった。それは湿っぽさがなく和やかな雰囲気であつた。このまま私の心に深く刻まれた。

弟の死に顔は穏やかそのもので棺には明るい色の花を選んで入れてあげた。奥さん・息子・娘それぞれの伴侶そして孫三人に囲まれて千の風になつた。亡くなる半月程前入院中の弟が肺炎の為I C Uへ移つたとの知らせを受け市内に住む長女と札幌の病院へ駆けつけ面会時を待つて病室に入った。弟は鼻に管がつかつていたがベッドに横たわり苦しい様子など見受けられず私はほっとした氣持で病院を後にした。翌日もホテルから病院へ直行してもう一度弟を見舞つた。「喜郎ちゃん」と二度三度声を掛け弟のぬくもりのある頬にそつと手を当てて心の中で「さよなら」を言つた。この時私にはこれが弟とのお別れになるのではないかとひそかに思つた。昨日は氣付かなかつたが孫三人で折つたという千羽鶴が病室の壁に飾つてあり私にはそれが却つて悲しみの象徴にも見えた。年の暮れ年賀欠札のハガキを用意してもその死が信じがたくいつもの年なら一氣に書く宛名書きも氣乗りせず思ひの外日數がかかつてしまつた。

今は主人の仏壇に一緒に写真を飾り毎朝水を上げ二人に「おはよう」と声を掛ける。これが私の一日の始まりなのである。弟は小学校低学年の時風邪がもとでリュウ

マチを思い長い間学校を休んだ。しかし病を乗り切りそれ以後心配するような事もなく順調であつた。旧制中学へはパンカラとは程遠い弟であつたが高下駄を穿き学生帽を被り冬等その頃流行の黒の長いマントをはおり近くに住む一年先輩の友人と一緒に相当な距離を歩いて通つた事は驚きであつた。学校へ向うその後姿が姉の私にはまぶしく映つた。

忘れもしない弟が就職したその年の五月一日。この日は働く者のメーデーの日。私は職場が休みでその日を利用して弟に会いに行つた。その日母は早くから台所に立ち二人の好物であるおはぎを作つて重箱に詰め持たせられた。朝一番の汽車で札幌へ向つた。その時札幌まで六時間半の長旅である。昼過ぎ札幌駅へ到着。駅から二・三分の所にあつた弟の職場へ直行、玄関前はメーデーに参加する職員で騒然としていた。きりりと鉢巻を締めメガホンを手に入口に集まつていた。弟は約束通り入口に立つて私の到着を待つていてくれた。同僚と二言三言言葉を交わし私のそばへ走り寄り二人は通りへ出た。弟に従つて中島公園へ向つた。ベンチに座つて重箱を広げ持参のお茶で少しおそい昼食を摂つた。その時漸く二人きりになつた喜びが湧いて来た。母手作りのおはぎはまるで五つ六つの子の握り拳程の大きさでその一つを物も言わず口に運び食べ終つてふつと笑顔になつた。瞬間

私は来て良かったと思つた。二人でポルトにも乗つた。話たい事が山程で弟は時折漕ぐ手を休めて話込んだ。その夜は弟の下宿に泊めてもらうようお願いしてあつたのでふとん一式お借りして重ねるように二つ並べて床に就いた。次の日朝食も弟と一緒にいたゞき送られて帰りの汽車に乗つた。弟は氣のまわらない姉に代つて下宿のおばさんにお礼をしてくれたであらうと後になつてから氣が付いた。この楽しい一日は弟が送つてくれた白黒写真でアルバムに残つてゐる。弟はよく和紙のハガキに季節の花や果物身のまわりの品々又旅先の風景等描いて使ひをよこした。私はその一枚一枚を日付順に束ね手元に残してある。花も果物の生きたいとして実物そのもの、もう何年か前、冬間近弟にベストお嫁さんにはカパーを編んで送つたら並べて描いて礼状が届いた。私は一度、個展をやつたら、と本氣で薦めたが「いやー、とてもとて

も」と照れ笑いで話を交わされてしまつた。年一度文化の日を挟んで道新の各教室の作品展が開かれ一度だけ私は江別に住む娘のところに行つていた時と重なつて二人で出掛けて行つた事がある。それ以来娘は案内を買つて身に行き弟は私にも欠かさず礼状をよこした。わが家には函館の夜景を描いた一枚が死後届けられ今私がいつても目をやる位置に飾つてある。光り輝く一つ一つを爪楊枝の先で描いたと生前言つていたが見事な出来で、それ

が唯一の形見となつた。又夏、大通り公園のピアガデー開幕を聞くに絵筆の片付けもそこそこ仲間たちと直行すると話していたので私はひよつとして弟の笑顔に会えるかなとテレビの画面に目をこらすが見出される事はなかつた。

弟は四十九日を迎え父母のお墓に入った。

暑い夏が終り高原にすすきの穂がゆれる頃弟の祥月命日を迎える。

本年度は三人の応募があった。

まず入選の片岡さんの作品。原稿用紙二二枚の力作であった。しかも、書かなくてはならないという、熱情が随所に感じられ、読むものの心を打つ。

作者は四歳で母親を亡くし、新しい母、継母と暮らすことになった。間もなく妹が生まれ、その後弟も生まれた。

父は獣医師となって独立し、稼業は苛酷なものだった。やがて、少し余裕が出来る時、母の本音がでて、自分の子だけ可愛がるようになった。母は妹を師範学校付属の小学校入れようと躍起になるのだった。

作者と妹の喧嘩以来夫婦関係がギクシヤクする。この前後が具体的に良く描かれている。父は作者を医者にさせたかったようだ。

戦後新制中学が設置され、女学校は廃止された。作者は通信教育で短大保育科を卒業し教諭の資格を取得し、八雲の幼稚園に就職。

継母との確執から自立しようとした念願が叶えられた

のであった。しかし一方、母に期待されていた妹は高校で不登校になっていった。そこで、いろいろな宗教に頼ろうとした。その妹に通信教育など勧めたり面倒をみたがうまくいかなかった。

母はあまり有り難がらず、ついに妹は精神科に入院した。

そんなとき作者に大きな転機が訪れた。将来を約束する男性と巡り合ったのであった。

妹の最期の「アリガトウ」が感動的だった。それは、長い確執の晴れた日であろう。

高田さんの作品は友達関係の難しさを色々な方面から考えているのが良い。

たとえば、親友といひながら平気で心を傷つける言動。勿論生まれも育ちも、さらに境遇も違う人間同志である。合わせようとする、無理がかかると言っている。

さらに心を塞ぐ大人の一言が心に重い負担をかける。中でも無視されることがつらかった。

いま文通での交流が楽しい。作者はひいて「親友」といわなくてもどこかで心の支えになれると結論づけた。

大滝さんの作品は男の子一人の弟との楽しかった思い出をしみじみと、書いているところに、魅力があった。

特に幼児期の弟の思い出や札幌を訪ねたときの母手作りのおはぎを食べるシーン等々実に細やかな描写に優れたところがみられた。

絵心があって絵はがきなどを寄せてくれた弟は本当にやさしかったようである。

そこはかかない悲しみが伝わって来る。

詩

佳作

春

田中ひなの

ポツ  
つぼみが聞く音  
ソヨソヨ  
そよ風が吹く音  
チチチチ  
小鳥のさえずり  
サラサラ  
川の流れる音  
耳をすませば聞こえる春の音  
きれいなピンク色が辺り一面に広がる  
すんだ水色が空を染めている  
ひらひらとまっ白な蝶が飛んでいる  
黄色のたんぽぽがにっこりと笑っている  
新しい命がたくさん生まれるこの季節  
ほかほかの春の日だまりに包まれて  
今日も春を感じている

詩

佳作

草むしり

永琉惇

八月十二日、草むしりをした。  
小さな庭先の一画である。  
少しく進み、草が箱の中にたまっていった。  
プロックが並べて置いてある草陰にアリがいた。  
草をむしっていくと、アリの群れに出合った。  
それでも進むと、今度はゾウリムシさん達の出合った。  
草むしりでアリさん達とゾウリムシさん達の住まいを  
粉碎してしまっていた。  
ボクのせいで大事な住まいを失なってしまっていた。  
ボクが追い出し、アリさん達とゾウリムシさん達とを  
ホームレスにさせてしまっていた。  
ああ、無情なることよ！

《ツミ》

それかといって、草むしりをしなければならぬのだ。

およそ五十分間の草むしりは終った。  
箱にはいっぱい草さん達となっていた。

ボクは草むしりをし、いずれ、屍となる草さん達へ  
無念の想いに駆り立てられた。

草さん達のいのちをむしり取ってしまったのだ。

《ジゴク》

草さん達へ、心の中で、無言のまま手を合わせていた。

慈悲を下さい

光を下さい

ボクのいのちの中に草さん達とアリさん達と  
ゾウリムシさん達のいのちが共存しているような  
気分させられたのである。

草さん達やアリさん達とゾウリムシさん達のいのちが  
苦しみに会いながら、いずれ「カゲロウ」のように  
消えていかなければならない道があるように、  
ボクも同じ道を辿っていることを覚えたのである。

《ソライノチ》

詩

佳作

おかみが来た！

水 関

清

夏の暑さが和らいできた

初秋の陽射しにくるまれた

ある土曜日の昼下がりに

三歳の三男が、急に遊びの手をとめて玄関にむかう

「おかみが来た！」

「え!?なんだって。オオカミが来たの？」

うなづく三男

徐々に近づくバイクの音

郵便局の配達だ

ポストに響く、小さな投函の音

ポストから郵便物を取り出した私の目に入ったのは、  
三男の満面の笑顔

大好きな幼児用教材、「しまじろう」が届いたのだ

当直明けの翌週の土曜日

うたた寝をしている私の枕元で、三男が叫ぶ

「おかみが来た！」

寝ぼけまなこの私の耳に入ってきた、小さな投函の音

ポストから郵便物を取り出した私の目に入ったのは、

三男の満面の笑顔

だけど、今回は私宛てのものだけだ

そのことを告げても、

三男の笑顔は変わらない

ニコニコとして、とてもうれしそうだ

その時、なにかが私の脳裏でひらめいた

三男に、届いたばかりの私宛ての封書を見せて、

「のぶちゃん、これなあに？」とたずねてみた

「おかみ!!」

笑顔いっぱい表情で、

元氣いっばいのこたえが返ってきた

「おかみ」とは「お手紙」のこと

幼い舌の動きでは、

「おてがみ」と言いづらくて、

「て」を抜かして「おかみ」と発音していたのだ

そして、おとなの耳では聞きとりづらい、

郵便配達のパイクが近づいてくる

かすかな音も、

やわらかなその耳で、しっかりと捕らえていたのだ

「おかみが来た！」とは、「お手紙が来た！」だったのだ

ヒトは、その心の辞書の中から言葉を選びながら、

一生をかけて、「お話」という織物を

日々、織り上げていくのだ

三男の心の中の辞書に加えられた、「お手紙」という言葉

まわらぬ舌で織り上げた、

「おかみが来た！」という、ことばの織物は、

今も変わらぬ彩りを保ち、

鮮やかな光を、私の心のなかで放っている

## 死にたいほどに辛い時

高田 枝寿子

死にたいと心が追いつめられる時がある  
そんな時は励ましも癒しの本も何も効かない  
あなたより辛い思いをしてる人がいると言われても  
私には私にしかわからない辛さがある  
誰にもわかってもらえず  
ただ一人自暴自棄

何も認めてもらっていないような  
やりきれない自分  
未来への失望

けれど

人は皆命は自分の意志と関係なく産まれ  
やがて意思とは関係なく死んでしまうものだ

理不尽なこともある  
でも不幸せか幸せかは自分にしか  
決められない

一番の味方は自分  
いつか余裕が出来たなら  
視野の狭かった自分とさよならしよう  
そうしてまた前に向かって歩いていこう

どんな時でも思っほしい  
自分には立ち上がる強さがあると  
死にたいが強い分  
生きたい力もつと強い筈だから

詩

佳作

## 私の中の世界

形部 玲菜

ある豊かな時代の  
たった一つの物語：

豊かな時代に生まれ  
物心ついた時から何でも言えば  
手に入るのが当り前。  
ハイテク化してゆく  
息づまった世界から  
一刻も早く抜け出したかった。

一風変わった私がいい。  
群に属して、行き詰まる位なら  
少し背伸びしてでも私でいたい。  
友情も大切。だけど時には、  
流されず振り回されない 私が必要。

皆、同じじゃロボットでもない。  
それをわざわざ十人十色の  
人間にしたという事は、  
人それぞれの物語を  
創るために、そうしたんだ。

豊かな時代だからこそ  
見えない明日がある。  
錆びてゆく  
息苦しい世界から  
一刻も早く飛び出したかった。

一風変わった私がいい。  
何かの枠に、はまる位なら  
少し浮く位に飛び抜きたい。  
安全も大切。だけど時には、  
ムクな強がりでも構わないでしょ

それが成長する傷となるなら。  
暗闇で昨夜つまづいた傷が  
今朝になって、痛み出す。

唾をつけたら染みて、  
ちよっぴり泣けた。

人工の光が増えた世の中じゃ  
見えない星がある。

その星が見えなくて  
道標となるものがなくても  
つき進むしか先はない。

ハイテクにはなっても

魔法使いには、なれない。

だから、カコやミライに  
飛び、逃げることは許されない。

迷ったって、悩んだって  
必ず明日は来る。

自分は自分らしく世界を描け！

ある豊かな時代の  
たった一つの物語：

## 選評 鷺谷峰雄

今回は応募作品数は、14点であった。例年よりは少なかったが全体の作品水準は低くはなかった。

佳作「春」

田中ひなの

春のめざまめを感覚でとらえています。「ポツとつぼみが開く音」「耳をすませば聞こえる春の音」この春の音の表現は詩的ですし、「すんだ水色が空を染めている」ここにも、ポエジーがあります。空を染めているのが詩です。

「たんぼぼがにっこりと笑う」もよいでしょう。たんぼぼのありのままの素直さをとらえています。

このように自分で考え作り出した春の音はオノマトベとしての擬音の発見があります。自分で考えるので

新鮮なのです。直截な表現からでも、詩的発見ができるのです。

ただ残念なのは「サラサラ、川の流れる音」はありふれた擬音です。川で、川の流れる音のひびきを、もういちど感性を動員して新しくつくってください。

それが詩作の楽しみなのです。

佳作「草むしり」

永琉 惇

草むしりをするので、発見があるのです。小さな庭先だけれど、アリやゾウリムシにとっては、自分の生を守る場所であり、城でもあるのです。それを僕は、その虫たちの住いを粉砕してしまつた。

でも、草むしりは自分の庭の手入れでもあるのです。

草も抜かれて、いのちを失なうのです。今わかったことは草とアリとゾウリムシとが共存していることです。

適切な表現です。庭の手入れは人間の立場でしかないのです。

ただし、「お慈悲を下さい、光を下さい」は感傷的です。添削しましょう。

佳作「おかみが来た！」

水間 清

三歳の子供の言語空間に、父が戸惑うのです。

「おかみが来た」は遠くからの郵便局員のバイクの音と、自分の家のポストに響く投函音が一致することでおかみが来たことになるのです。これらは三男の聴覚にとらえられていてそれが満面の笑顔になるのです。この一つが欠落しても納得しないでしょう。バイクの音と投函音、これで三男は満足するのです。

「おてがみが来た」は三男にとって、まだ別の世界なのです。今はこれでよいのです。

父のボキヤブラリーである言葉の織物におりあげられても、父の思い出なんです。その織物は父の胸裏で「おかみが来た」として、いつまでも輝きます。

最初の二行は削って「ある土曜日の昼下がり」から始めると行が無駄になりません。

### 佳作「死にたいほどに辛い時」

高田枝壽子

辛いと言われても実感がないと私にはわからない。不幸せか幸せかは自分にしか決められない。だから視野の狭かった自分とさよならしよう。そしてまた前に向かって歩いていこう。

自分には立ち上がる強さがある。生きたい力もつと強い。生きることに恣意的な考え方はいらない。生きる欲求があればよい。生きたい力はもつと強いのです。

もう自分に語ることで生きる力量

になる。思惟を持つことでゆるぎなくなる。安定感が出る。自分に前向きな認識を語っていただきます。散文性が強いので、なるべく詩的感性で語ってください。

### 佳作「私の中の世界」

形部 玲菜

豊かな時代に生まれても一風変わった方がいい。みんな同じならロボットでもいい。それを人間にしたいのには不安な明日があるからだ。それでも自分は自分らしく生きるしかない。自分を拒絶せず自由に生きるのは個性しかない。

自分を否定しないことが私をだいにすることです。ここはよく書いていますが、あとは言葉の選択です。詩で表現することをたえず考えて作りましょう。

作品の構成は巧みにくふうしていますので完成度は高くなっています。

## 短歌

## 山県庸美選

### 入選

看病に追われてめくる花暦いつしか今はひまわりの季節  
遺骨とは貝がら小石の袋づめ八月九日兄の戦死日  
老い二人額をよせて判読す文字覚え初めし孫からの便り

柴田 泰子  
今田 優二  
中島 美智子

### 佳作

五十年暮らして来たる思ひ出は夜なべの夫の鉄筆の音  
その日燦く石炭買ひて戻り来し亡母を思ふ雪降りだせば  
空澄みてコスモス似合う季を迎え親しき友へ便りしたたむ  
余生おくる翁姫をいたわれる介護の君らの声あたたかし  
あこがれの海のある街に嫁ぎきて七十年経て終の棲家に

圓山 洋子  
竹田 光彦  
大滝 洋子  
坪谷 郁  
能登 淑子

## 選評

入選

看病に連れられてめぐる花層いつしか  
今はひまわりの季節

やや感傷的ではあるが、看病の具体性を省いた嫌味のない歌で、音読すると気持ちが良い。ゆえに溫和しいが。

看病の歌は人の心の奥を掘り下げるので応募は少ないが、挑戦の価値あり。

遺骨とは貝がら小石の鏡づめ八月九日兄の戦死日

余計なことと言わず、中心を捉えられた歌。戦死日はめいになちと仮名をふらずとも読者の視力に訴えている。戦争の傷は何時までも消えることはない。

古い二人顔をよせて判読す文字覚え  
初めし孫からの便り

前の歌と違い、二人生きていればこのような仕合せにも巡り合えるんですよ。具体的に良く纏められた歌。

佳作

五十年の刻を暮らして思ひ出は夜  
なべの夫の鉄筆の音

第二句の「刻を暮らして」は落ち着かないので、「五十年暮らして来たる思ひ出は夜なべの夫の鉄筆の音」としたい。ご主人が謄写版の仕事に従事されていたのか、教師だったのかわからないが、輻引きの原紙を鍵盤で切る音が夜なべで、何年ぐらい続いたのでしょうか。時代がよみがえってくる歌。

その日焚く石炭買ひて戻り来し亡母  
を思ふ雪降りだせば

結句の「雪降りだせば」は少し弱いかも知れないが、回想の歌ですので。第三句の「戻り来し」が効いている。「帰り来し」では仕事帰りと取られるので。当時の生活が良く出ている歌。

空澄みてコスモス似合う傘を迎え親  
しき友へ便りしたたむ

やや平凡とも取られるが、素直な詠み方に共感するものがある。

余生たのしむ翁嬢をいたわりつつ介護の君ら声あたたかし

初句の「余生たのしむ」は七音なので、次のように添削してみたが「余生おくる翁嬢をいたわれる介護の君らの声あたたかし」下の句を生かして採りたかった歌ですが少し甘いですか。

あこがれの海のある街嫌ぎきて70年  
は終の棲家となりぬ

この歌も下の句が落ち着かないので「あこがれの海のある街に嫁ぎきて七十年経て終の棲家に」としたい。上の句、若き日の作者が出ていて良い歌。

今回も多くの公募の中から選ばせていただきましたが、短歌は黙読ではなく声を出して読んでください。黙読からは論理しか伝わりませんが、音読は感情も、リズムも伝えてくれます。加えて短歌をもっと好きになって下さい。

なお、入選作品は原則として、添削をしないで採りたいと思っております。

## 選者詠

山 県 庸 美

ふるさとの肉親思ふ大正期の「アララギ」に読む日本の心

筋委縮症の渡辺松男氏に釈返空賞贈呈のニュースをうれしく見たり

駆足の仕種をしつつ校長先生遅れし児童に声掛くる朝

卒論の提出日近きか氷結の朝つきつぎと女子大生ゆく

眼の前の草原に鳴く雲雀のこゑ腰かがめ聴く八雲の町に

## 入 選

僧院へ吹く風碧し聖五月  
父と来て田植の水に映りけり  
聳そはだてる直立涼し杉木立

圓山 洋子  
清水 法雄  
佐々木 克子

## 佳 作

涼しさの水嘯みくたく水車かな  
大夕焼おほゆり使ひきつたる一ト日ひかな  
星空のひと夜任せる梅筵  
ほろ酔うてものかなしうて花疲れ  
昼顔や若い数人の立ち話  
敗戦忌南に散華の師を悼む

四ッ柳 高保  
岩崎 とし恵  
高山 京子  
坪谷 郁  
竹田 光彦  
石岡 繁雄

## 選 評

## 入 選

## 僧院へ吹く風碧し聖五月

「聖五月」を「聖母月」とも云います。  
歳時記によれば、カトリック信者は五月を聖母マリアの月と定めて特にマリアを崇敬する。そのため時候の五月と区別して特に「聖五月」と呼んでいる。とあります。「僧院」は云うまでもなく三ツ石のトラピスト修道院ですね。新緑のすがすがしい修道院の初夏を詠じてとてもいい句になりました。

「吹く風碧し」と言い切ったところもいいですね。この作者、他の投句を見ても、力量のある方と覚えまして。ただこの句「僧院」と「聖五月」で付け過ぎと云われるかも知れませんが、私は逆にだから面白いと思いました。

## 父と来て田植の水に映りけり

「田植」は六月の季語です。代を搔いて、水を張った田に早苗を植えます

ね。「最近では五月頃植付機で田植をするように、手作業の田植はあまり見かけなくなつた」と歳時記は云っています。この句面白いと思つて入選句とさせていただきます。「父と来て」とありますが、これはどう云うことなのでしょう。父と一緒に見に来ていると解釈したのですが――。それとも父と一緒に田植していると云うことでしょうか。いずれにしても「田植の水に映りけり」が面白い表現と思えました。

父と作者が田植の水に映っているのを「あゝ映っているな」と見ているのです。ことに「父と」がいいですね。

聳そはだてる直立涼し杉木立

一見して平凡にも見える句ですが、そうではありません。無駄なことは遣がないのです。なんとしても「涼し」が効いていますね。「涼し」がびたりと当てはまりました。杉木立が真っ直ぐ林立していますね。空高くまっすぐ

です。作者はそれを仰ぎみて「涼し」と云つたのです。私達は杉木立の中を歩いてみると誰もなんとなく清々しさを覚えますよね。あれは直立して聳えているからでしょうね。それが何度もう云いますが「涼し」だったので。

## 佳 作

## 涼しさの水嘯みくたく水車かな

この句も「涼し」が季語ですね。七月の季語です。朝涼・夕涼・涼風、などあります。「水嘯みくたく」との表現がよかつたと思います。今ではこのような「水車」が見かけなくなりまして。「水車」が水を嘯みくだしているのを作者はじつと見ているのですね。単調な水車の仕種ですけども、どうしてか飽かずいつまでも眺めているのですね。こういうことは誰れにもよくあることです。「涼しさ」が心の中心から入ってきているのです。またこの句から私には水車小屋も見えています。

水車の動力を小屋の中に伝えて、麦搗きや米搗きをしている様子も思い出

し沈められました。

### 大夕焼使ひきつたる一ト目かな

夕焼は四季を通してあるのですが、俳句で単に「夕焼」と云えば夏の夕焼になります。この季節の夕焼がもつとも華やかです。七月頃ですね。ところでその頃の季語に「日盛り」とか「炎天」があります。炎天は酷暑の空です。日盛りは万物が息をひそめて日の傾くのを待つ思いですね。そして落日がやってくる。その際激しい燃えるような紅や黄を放射します。壮大な光景ですね。「大夕焼」です。空は一ト目を太陽の輝きで使い尽し、落日の大夕焼で終演の幕を下ろすのですね。「あゝ今日も終つた」と云う作者の感懐が「一ト目かな」にこめられています。歳時記の例題句に「夕焼のひろがるほどに孤独知る 山木歩禪」の句があります。

### 星空のひと夜任せる梅筵

歳時記に「梅干す」「梅干」があります。その中に「梅筵」もあります。ただし「梅干」と云ってもでき上がった

た食用の梅干は季節とはならないことを伝えていきます。梅干づくりを句にすることなのですね。さらに歳時記の記述をまとめますと、梅を干すのは天気

の定まった土用中が適当であり、夜干しにして夜露にあてるのもよい、とあります。ついでに記しておきますが、夏の土用は、七月二十一日頃が土用入りですね。それを土用太郎と云うのだからです。二日目を土用次郎、三日目を土用三郎と云い、この三郎が照らぬ土用鰻、土用鯉など季語にありますね。他に土用炙、土用波、土用干し、暑中見舞も土用見舞と云いますね。「梅干し」も土用と関りがあって「三日三晩の土用干し」との云い伝えがあるからです。

この作者は、その「梅干し」を詠じました。「星空」に「梅筵」を任せましたよ。よろしく、と。素晴らしい句になったと思います。

### ほろ酔うものかなしうて花疲れ

面白い句に出会いました。高齢の女性の句のようです。いい句ですね。私はこの句から次の百人一首を思い起こしました。「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」の一首です。小野小町の歌ですね。もう一句「おもしろうてやがてかなしき鶴舟かな 芭蕉」にもどこやら共通している心情があると思います。

### 昼顔や老い教人の立ち話

「昼顔」は野原や道端などに自生する蔓性の草花ですね。何かそばにあればそれに巻きついて咲いています。涙屋顔の季語もありますね。六月の季語です。「昼顔」を配したのがよかったのです。なんと云うこともない句なのですが、どこやら親しみを覚える句になりました。ただ「老い教人」と云う表現が気になります。私はこの句から老漁夫たちが浜で立ち話をしている景を想像しました。

### 敗戦忌南に散華の御を悼む

作者は私と同じような年代ですね。昭和二十年八月十五日は、私達少年時代のことでした。「敗戦忌」とは戦争で亡くなられた方々の追悼の意をこめたものと歳時記に記されています。「散華」は辞書に華と散ると解して戦死のこと、とあります。歳時記の例題句を一句記しておきます。「敗戦忌宵待草の花むれて 十島三郎」

選者吟

熊澤 三太郎

初買のリユックに妻と詰め分けて

クッキーをすぐ食<sup>は</sup>み尽し寒雀

泣き止みしや、児<sup>こ</sup>の窓辺春の雪

母の日やふと早世の父のこと

赤べこも黒べこも秋惜しむかに

川柳

池 さとし 選

入選

波立った心を撫でるみすゞの詩  
お互いのミス見ぬふりの老夫婦  
今日もまた庭の草抜く誕生日

白井靖孝  
滑川昌子  
水関清

佳作

月ひとつ多情は秘めるものという  
自助努力一人ぼっちを覚悟して  
あるがまま生きとし生きた人生譜  
寄り添って見たい聞きたい七年後  
老ひとりサブリメントの箱ならべ

神羊孤  
浜口豊子  
能登淑子  
岩本真穂  
水島悦子

## 選評

### 入選

#### 波立った心を撫でるみすずの詩

「波立った心」で表現される内面の揺れ動くさまは、読み手にいろいろなドラマを想像させてくれる。

一つの作品の中に、いいコトバがひとつあれば作品は生き生きとしたものになる。

そのコトバが、作者の想いというものをも揺曳するからである。「みすずの詩」の座五が作品に上手に溶け込んで成功した。

#### お互いのミス見ぬふりの老夫婦

一読しただけで、作者の心がそのまま素直に読み手の中に入ってくる作品。

長い人生行路、もちろん山あり谷ありだつたりの筈なのだが、それを乗り越えての勲章。それは、阿吽の呼吸であつたり、庇い合う思い遣りの気持ちとなる。

何げない、ごくありふれた表現の中に、支えあう老夫婦の日常が醸し出されている。

#### 今日もまた塵の草抜く誕生日

誕生日と、自分史の中で大きなイベントという意識づけをしていたのは、何歳頃までであつただろうか。

現在はもう、そのような感慨に浸ることも無くなつてしまつたかのようでもある。

昨日から今日、そして明日への通過点でもあるかのように、日常化された光景の吐露。

### 佳作

#### 月ひとつ多情は秘めるものという

美しい情感の世界が構築されている。とかく月とか星を題材に取り上げると、単なる叙事で終わってしまう傾向が多い。しかしこの作品は、見事に叙情化している。

この作品の底にあるものは、まぎれもなく作者自身であり、人間であり、

心である。

#### 自助努力一人ぼっちを覚悟して

やがて、自分自身にふりかかってくるであろう現実には、どう立ち向かうかの決意を見る。

#### あるがまま生きとし生きた人生讃

何度も読み返してみると、静かな佇まいの中に見えてくる余情の世界が美しい。

#### 寄り添って見たい聞きたい七年後

東京でのオリンピックが決定した。その時まで頑張りたいの穏やかな心が見えてくる。

#### 老ひとりサブリメントの箱ならべ

だれもが身に覚えがありそうで、微笑を誘つてしまふような川柳となる。頼みの綱のサブリメントの種類が多くて困る。

※最後に若々しい感性のジュニア作品を列記しておこう。

スマホより車窓の景色美しい(甲3)

今でしょと言いつついつもあとまわし(甲1)

夏休みいこと花火楽しいな(甲2)

夏休みあけたらハードなまいにちだ(甲2)

いつの日も愛は必ず忘れない(甲3)

友情で一人の命助けよう(甲1)

友情で一人の命助けよう(甲1)

選者吟

池 さとし

うつむいて暫し小さな森になる

別れのように逢瀬のように霧流れ

錆びた脳アサガオ日記書いている

生前葬霧いちまいを野に放つ

戦歴はいらぬ崩れる粉ふきいも

審査委員紹介(※本紙各部門受賞作品の掲載順)

随筆

函館文学学校講師

対馬俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東璋二

『表現』同人

ノンフィクション

函館文学学校講師

竹中征機

詩

北海道詩人協会副会長

鷺谷峰雄

函館金曜詩会代表

短歌

北海道アララギ地方編集委員

山泉庸美

道南歌人協会会長

俳句

函館俳句協会会長

熊澤三太郎

『ホトトギス』同人

川柳

函館川柳社主幹

池 さとし

あとがき

『市民文芸』第五十三集をお届けします。  
今年度も、七月から九月に作品を募集しましたが、作品集の刊行については紆余曲折がありました。皆様のご協力をいただき、発刊の運びとなりました。  
今年の各部門の応募作品数は、随筆 十六編、小説 九編、文芸評論 三編、ノンフィクション 三編、詩 十四編、短歌 六十九首、俳句 九十一句、川柳 九十句 計 二九五点となりました。  
例年より作品数が減少したものの、選考水準を落とすことなく、逆に入賞作は増え、少数精鋭の結果となりました。特に小説部門では大学生が入選、詩部門では中学生と高校生が佳作を受賞され、若い才能が輝きを放ちました。  
本年度より、ホームページでの作品集公開に取り組みことで、全国に情報を発信することができ、多くの方々にも関心を寄せていただき、応募作品の増加につながることとを祈ります。

最後になりましたが、各審査員の先生方にはご多忙にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 一第五十三集一

発行日 平成二十六年三月二十二日

編集・発行 函館市中央図書館

函館市五稜郭町二六一一

TEL (〇一三八) 三五―六八〇一

製本協力

北海道函館五稜郭支援学校  
高等部環境・流通サポート科